

# ふしぎな人

江戸川乱歩

青空文庫



# 1 マントにんぎょうのまき

きむらたけしくんは、しょうがつころの二ねん生で、とうきょうのひろいおうちにすんでいました。

おとうさんは、あるかいしやのしやちようさんです。

きむらたけしくんのおうちのちかくに、ふしぎなせいようかんがあつて、そこにふしぎな人がすんでいました。

二かいだてのふるいせいようかんで、そのまわりは、木のいつぱいはえたにわでかこまれていました。

このふしぎないえのふしぎな人は、林<sup>はやし</sup>さんという、四十ぐらいのおじさんでした。

おくさんも子どももなく、たったひとりで、そのひろいせいようかんにすんでいるのです。

きんじよの人たちは、このせいようかんをばけものやしきとっていました。また、そこにひとりですんでいる林さんを、まほうつかいとよんでいました。

ところが、きむらたけしくんのおとうさんは、このふしぎな人とだいのなかよしだったので、林さんは、たけしくんのおうちへよくあそびにきました。

おとうさんはたけしくんと、いもうとのしようがっこう一ねん生のきみ子ちゃんに、よくこんなふうについてきかせるのでした。

「林さんはかわりものだが、けっしてわるい人じゃない。たいへんちえがあるのだよ。そのちえで、いろいろふしぎなことをやってみせるので、まほうつかいのようにみえるだけなのさ」

たけしくんもきみ子ちゃんも、林さんとなかよしになっていました。

ある日のごご三じごろのことです。たけしくんときみ子ちゃんは、林さんのおうちのわであそんでいました。たくさんの木にかこまれたひろいしばふにこしをおろして、林さんのおはなしをきいていたのです。

林さんはくろいふくをきて、大きなくろいネクタイをとんぼむすびにしていました。

ふちなしの四かくなめがねをかけ、ぴんとはねた口ひげと、三かくのあごひげがあります。いかにもせいようのまほうつかいみたいなかっこうです。

その林さんが、こんなことをいいだしました。

「きみたちに、おもしろいものをみせてあげようか。びっくりするようなものだよ。わたしは、むこうの木のしげみにかくれるからね。すると、あそこのしいの木のねもとから、小さいものがあらわれるのだ。よくみているんだよ」

そういって、林さんは、しいの木のむこうのしげみの中へはいつていきました。

たけしくんと、きみ子ちゃんは、むねをわくわくさせながら、そのしいの木の下を、じつとみつめていました。

あたりは、しいんとしずまりかえています。はるのおてんきのよい日で、しばふには、日がてつています。でも、しいの木のへんからむこうは、木のはがしげつていたので、すこしうすぐらいのです。

「おじさん、なにをみせてくれるんだろうね」

たけしくんがいますと、きみ子ちゃんは、にいさんのかおをみつめながら、「あたし、こわいわ」と、いかにもきみわるそうにささやくのでした。

すると、そのときです。あの大きなしいの木のねもとから、なにか小さなものが、ちよこちよこはいだしてきたではありませんか。

むしでしょうか。いや、むしにしては、大きすぎます。

しかも、それは、はっているのではなくて、二本の足であるいているのです。

それは、たかさ二十センチぐらいの、おもちゃのにんげんなのです。

くろいふくをきて、くろいマントをはおり、くろいソフトをかぶっています。

かおは小さくてよくみえませんが、なんだか林さんのかおにているようです。

かわいらしい四かくなめがねがちかちかひかり、三かくのあごひげがはえています。

そのおもちゃのにんげんが、まるでほんとうのにんげんのように、てくてくあるいているのです。

きつと、ぜんまいじかけであるくようになっているのでしようが、それにしても、なんてじょうずにあるくのでしよう。

その小さなにんげんは、しいの木のとなりの大きな木にかくれてしまいました。

たけしくんときみ子ちゃんは、いまにあの木のうしろをとおりすぎて、またあらわれるだろうとまっています。

やがてあらわれました。しかし、これはどうでしょう。あのにんぎょうが、たかさ四十センチほどに、大きくなっているではありませんか。

木のうしろをとおるあいだに、せのたかさがばいになってしまったのです。

「わあ、ふしぎだ。おじさんは、やっぱりまほうつかいだねえ。おじさん……、おじさん……」

たけしくんは、そういつて、しげみのうしろにいる林さんによびかけましたが、林さんは、どこかへいつてしまったのか、しいんとしずまりかえつて、なんのこたえもないのです。

すると、ばいの大きさになったにんぎょうは、二メートルほどあるいて、そのつぎの木のみきのむこうがわにかくれました。

まもなく、そこをとおりすぎてあらわれたにんぎょうをみますと、こんどは、一メートルもあるような大きさにかわつていました。

きみ子ちゃんとそんなにちがわないぐらいの大きさです。

たけしくんときみ子ちゃんは、びつくりしてかおをみあわせました。いよいよきみがわるくなつてきたからです。

一メートルになつたにんぎょうは、くろいマントをこうもりのようにひらひらさせて、木のみきをぐるつとまわり、もとのほうへもどつてきました。

そして、さいしよのしいの木のみきにかくれたかとおもうと、つぎにそこからあらわれ

たのは、なんとおとなの大きさのにんぎようだったではありませんか。

いや、にんぎようではなくて、ほんとうのにんげんだったのです。

「わははははは……。どうだ、おどろいたかい。わしだよ。おじさんだよ。

おじさんはね。二十センチぐらいの小人にもなれるんだよ。

そして、いまのように、みるまに大きくなって、もとのすがたにもどれるのだよ」

ああ、なんとというふしぎでしょう。それでは、さっきの小さなすがたも、にんぎようではなくて、林さんだったのでしょうか。

## 2 てんにのぼるまほうつかいのまき

きむらたけしくんは、いもうとのきみ子ちゃんとうたりで、ちかくにあるふしぎなせいようかんへあそびに行きました。

そこには、林さんという、ふしぎな人がすんでいました。きんじよの人は、林さんをまほうつかいとよんでいたのです。

でも、たけしくんのおとうさんと、その林さんとは、お友だちなので、こわくはありません。

せん。

そのぼけものやしきには、ひろいしばふのにわがあるのです。

まほうつかいの林さんは、そのにわで、たけしくんときみ子ちゃんに、ふしぎなことをやってみせました。

虫のように小さな林さんがあらわれ、それがだんだん大きくなって、ほんとうの林さんのすがたにもどったのです。

たけしくんときみ子ちゃんは、びっくりしてしまって、ものもいえないでいました。

「わははは……。おどろいたかい。これぐらいのことにおどろいてはだめだよ。

いまにもつとびつくりするようなことがおこるからね。

せけんの人は、わしをまほうつかいだといっているが、それはほんとうかもしれないよ。いいかい、こんどはどんなことがおこるか、よくみているんだよ」

くろいマントをきた林さんは、そういったかとおもうと、にわの中で、いちばん大きな木の下へ行つて、そのふといみきを、するするとのぼりはじめたではありませんか。

くろいマントがひらひらして、大きな鳥がのぼっていくようです。

みるみるみきをのぼりきつて、はのしげったえだの中へかくれてしまいました。

下のえだがガサガサとうごき、その上のえだがうごき、また、その上のえだがうごき、すがたはみえませんが、林さんがだんだん上のほうへのぼっていくのがわかります。そして、とうとうてっぺんまでたどりついたようです。

たけしくんたちはかおをそらにむけて、その大きな木のとっぺんをじつとみつめていました。

しばらくすると、ブルンブルンブルン……と、みようなおとがきこえてきたではありませんか。

木のとっぺんが大風にふかれているように、ザーツとゆれています。

そのとき、そのとっぺんから、大きなくらい鳥のようなものがそらへまいあがりました。

「あらっ、おじさんだわ。おじさんがとんでいくわ」

きみ子ちゃんが、たけしくんのかたに、すがりついてさげびました。

たけしくんは、びつくりしてしまって、ものもいえません。

大きなこうもりのようです。林さんは、くろいマントをひらひらさせながら、たのしそ  
うにとんでいきます。

「あっ、プロペラだ。きみ子ちゃん、あれ、プロペラだよ。」

ほら、林さんのせなかの上で、きらきらひかかってまわってるだろう。ヘリコプターとおんなじだ。プロペラのちからでとんでいるんだよ」

たけしくんは、そういつて、目をまんまるにしてそらを見つめました。

林さんは、あのプロペラをまわすきかいをせなかくくりつけてとんでいるのでしょうか。そんなべんりなきかいがあるなんて、きいたこともありません。

林さんはえらいはつめいかなのでしょうか。

だれもしらないふしぎなきかいはつめいするので、まほうつかいのようにみえるのでしょうか。

「あらあら、もうあんなに小さくなったわ」

「ほんとだ。もうからすぐらいの大きさだね。いまに、すぐめぐらいになって、そして、みえなくなってしまうよ」

まっくろなふしぎな鳥は、たかくたかく、そらにまいあがって、たけしくんがいったとおり、すぐめぐらいの大きさになり、それから、ちようちようぐらいになり、はえぐらいになり、そして、とうとうみえなくなってしまうました。

「どこへ行ったんでしょう。てんにのぼってしまつて、もうかえつてこないのじゃないか

しら」

きみ子ちゃんは、かなしそうなかおになって、なみだぐんでいました。

「あつ、あれをござらん」

たけしくんが、きみ子ちゃんのかたをゆさぶりました。

「まあ……」

きみ子ちゃんも、そのほうをみると、あつとおどろいたまま、ものもいえなくなりました。

さっきの大きな木の下に、林さんがにこにこわらってたっていたのです。

いつのまにそらからもどってきたのでしょうか。ほんとうに、こんなふしぎなことってあるものでしょうか。

「あはははは……。またびつくりしたね。そうじゃないよ。ぼくは林さんじゃないんだよ」  
四かくなめがねをかけ、ぴんとはねた口ひげと、三かくのあごひげをはやし、くろいマントをきた、林さんとそっくりな人が、林さんじゃないというのです。

「よくみてござらん。ほら、ぼくはこんなに小さいじゃないか。きみたちとおんなじ小学校の三ねん生なんだよ。でも、林さんによくにてるだろう。そっくりだろう」

なるほど、よくみると、せが小さいのです。こえも子どもです。

「あははは……、まだわからないかい。これがさつきの林さんのまほうのたねなんだよ。こつちへ来てごらん。すっかりたねあかしをしてやるから」

たけしくんもきみ子ちゃんもさつきからつぎつぎとおこるふしぎに、ゆめでもみているようなきもちでした。

とてもおもしろいどうわの本でもよんでいるようなきもちでした。

林さんと、そつくりなしようねんが、こつちへ来てごらんというので、ふたりは、おずおずとそのほうへちかよっていききました。

「ほらね、これがまほうのたねだよ」

しようねんは、そういつて、木のみきのうしろをゆびさしました。

「これが、さいしよにあらわれたにんぎようだよ。ぜんまいじかけであるくのさ。二十七センチぐらいしかないだろう。」

それから、あつちにもう一つある。やつぱりぜんまいじかけなんだよ。これは四十センチぐらいあるだろう。二つともあるかせてみようか」

しようねんは、そういつて、二つのにんぎようをもってきました。

「いいかい、みててごらん」

二つのにんぎょうをたてて、せなかのねじをまきますと、二十センチと四十センチの小さい林さんが、足なみをそろえて、とこととあるきでしたではありませんか。

四かくなめがねをひからせ、口ひげをぴんとはねて、くろいマントをひらひらさせながら。

「こうして木のみきにかくれるたびに、だんだん大きいといれかわっていったんだよ。そして、三ばんめにあらわれたのが、このぼくだったのさ。」

それから、ぼくがこの木のみきにかくれると、そこにまちかまえていた林さんが、すがたをあらわしたというわけだよ。わかったかい、これがまほうのたねなんだよ」

きいてみるとすっかりわけがわかりました。

「ねえ、さつき林さんがそらへのぼっていったのは、プロペラのしかけでしょう。でも、どこへ行ったのかしら。てんにのぼったまま、かえってこないのかしら」

たけしくんが、しんぱいそうにいいますと、しょうねんは、さもおかしそうにわらいだしました。

## 3

きむらたけしくんと、いもうとのきみ子ちゃんは、まほうつかいといわれる林さんのうちへあそびに行つて、いろいろふしぎなことをみました。

おしまいには、林さんは、たかい木のでっぺんから、こうもりのように、そらへとんでいつてしまいました。林さんは、にんげんひとりだけをほごぶプロペラをはつめいしていたのです。

そのあとで、林さんとそつくりのすがたをしたしようねんが、木のうしろからあらわれて、いままでのふしぎなことをいろいろとせつめいしてくれましたが、たけしくんが、「林さんは、てんにのぼったまま、かえつてこないのかしら」といいますと、しようねんは、さもおかしそうにわらいました。

「林さんは、もうとつくにうちへかえつてゐるよ。  
むこうのはらつぱにおいて、そのひみつのいり口から、うちへかえつたのさ。ぼくたちもはいつてみよう。」

うちの中にもふしぎなものがたくさんあるんだよ」

しようねんがそういつてさそいますので、たけしくんときみ子ちゃんは、しようねんのあとについて、せいようかんの中へはいっていききました。

おもいドアをあけて、うすぐらいげんかんにはいり、ひろいろうかをおくのほうへすすんでいききました。

すると、むこうのドアをひらいて、そこからみような人がでてきました。

ぴったりみについた、むらさきいろのビロードのふくをきています。そのかたやむねに、ぴかぴかひかるきんいろのかざりがついています。

あたまにはむらさきビロードの三かくぼうしをかぶっています。サーカスのきよくげいしのようなかっこうです。

よくみると、それは林さんでした。めがねも口ひげもなくなっています。あれはつけひげだったのでしよう。

「たけしくん、きみ子ちゃん、こっちへおはいり。おもしろいものをみせてあげるよ」

しようねんといっしょに、ふたりがそのへやにはいりますと、林さんは、たんすのひきだしから、きいろの中に、くろいてんのあるけがわを二つとりだしました。

「これはひょうのけがわだよ。たけしくんもきみ子ちゃんも、もうじゅうのひょうになっ

てみたいとはおもわないかね。このけがわをきれば、すぐにひょうになれるんだよ。

目のところにはガラスがはめてあるから、そとがよくみえるし、口の中には、ふえがついていて、それをふくと、ひょうとそつくりのうなりごえがでるんだよ」

それをきくと、たけしくんもきみ子ちゃんも、一どひょうになってみたくなりました。林さんはふたりのかおいろをみて、手ばやくひょうのかわをきせてくれるのでした。

けがわはぴつたりとみについて、たいへんきもちがいいのです。

たけしくんは、へやの中をのそのそとはいまわってみました。

そしてけがわの口の中にあるふえをふきますと、

「ウオーツ、ウオーツ」

という、おそろしいうなりごえがでるのです。

きみ子ちゃんもかわいいめすのひょうになってたのしそうにあるいています。そして、ときどき、ふえをふいているらしく、

「ウオーツ、ウオーツ」

というこえがきこえてきます。

にんげんの足と、ひょうのあと足とは、まがりかたがちがつているのですが、けがわに

なにかしかけがしてあるらしく、ちよつとみたのでは、それがわかりません。

うつくしいきよくげいしのふくをきた林さんは、どこからかながいむちをとりだして、「ピシツ、ピシツ」

と、それをならしました。

「おい、たけしひょうにきみ子ひょう。どうだね、もうじゅうになって、たのしいかね」  
そうきかれたので、ふたりは、ふえをふいてこたえました。

「ウォーツ、ウォーツ」

「ウォーツ、ウォーツ」

林さんはわらいだしました。

「わははは……。うまいうまい。すっかりひょうになってしまったね。ところで、わしはもうじゅうつかいだから、きみたちにげいをさせなければならぬ。さあ、ふたりとも、あと足でたちあがつて……。」

あと足でたちあがつて、ちんちんをするのだ」

そして、ピシーツとむちがなりました。

たけしくんもきみ子ちゃんも、あと足でたち、まえ足をもがもが、やっています。

「よろしい。こんどはすこしむずかしいよ。このわの中をどびこえるんだ」

林さんは、どこからかはりがねのわをもちだしてきました。

「ほんとうは、このわにわたをまいて、アルコールをしませて火をつけるんだ。その火のわの中をどびこえるんだよ。」

いまはれんしゅうだから、火はついていない。

いいかい。むこうからはしつてきたいきおいで、この中をどびこすんだ。さあ、しつかり」

そして、むちがくうちゅうで、ピシーツ、ピシーツとなるのでした。

ふたりともいくどかやりそこないましたが、たけしくんは、とうとうわの中をどびぬけることができました。

きみ子ちゃんは、どうしてもできないので、あきらめて、そこへうずくまってしまいました。した。

「よし。きようは、れんしゅうはこれまでにしておこう。そして、きみたちをなかまにひきあわせてやるよ」

林さんは、みょうなことをいって、ピシーツとむちをならしました。

「さあ、あるくんだ。わしについてくるのだ」

そういって、さきにたつて、ドアのそとにでると、うすぐらいろうかを、もつとおくのほうへはいつていきます。

たけしひょうときみ子ひょうは、のそのそとそのあとからついていきました。

ろうかのおくに、とくべつにがんじょうなドアがありました。林さんは、それをひらいて中にはいいり、まるでいぬでもよぶように、チョツ、チョツと、したをならしながら、ふたりに手まねきしました。

ふたりは、なんのきもつかず、そこへはいつていきましたが、あつというまに、へんなものの中へおいこまれてしまいました。

てつぼうのはまつたろうやのようなものでした。

林さんは、ふたりをそこへおいこむと、いり口のとびらにガチャンとかぎをかけました。それは、もうじゆうをいれるおりだったのです。みると、そのひろいへやには、たくさんのおりがならんでいました。

そして、それらのおりの中には、ライオンやとらやくまやひょうや、いろいろなもうじゆうが、べつべつにいれてあるのです。まるでどうぶつえんのようなようでした。

ひょうになったたけしくんときみ子ちゃんは、そのどうぶつえんのおりの中へ入れられてしまったのです。

ふとみると、じぶんたちのいれられたおりのすみに、なにか大きなものが、うずくまっています。

ピシーツ。おりのそとで、林さんのむちがなりました。

すると、うずくまっていたやつが、ぬくつとたちあがったではありませんか。

とらです。大きなとらです。とらは、「ウォーツ」とうなって、らんらんとかがやく目で、たけしひょうときみ子ひょうをじろつとにらみつけました。

ああ、たけしくんときみ子ちゃんは、大きなとらのいるおりの中へ入れられたのです。

ほんとうのひょうなら、とらにまけないかもしれませんがこちらはにげんの子どもです。とらにかなうわけがありません。

ああ、どうしたらいいのでしょうか。

ふたりは、いまにもとらににくいころされてしまうのではないのでしょうか。

たけしくんときみ子ちゃんは、ふしぎな人の、ふしぎなせいようかんの中で、もうじゅうのひようのけがわをきせられて、ふたりとも、ひようになってしまいました。

そして、せいようかんのおくのほうのひろいへやへつれていかれましたが、そこには、たくさんのどうぶつのおりがならんでいました。

そのおりの中には、ライオンやとらやくまや、そのほか、いろいろなもうじゅうが、あるきまわつたりねそべつたりしていました。

たけしくんときみ子ちゃんの二ひきのひようも、一つのおりの中へいれられました。ふときがつくと、そのおりのすみに、一ひきの大きなとらがねそべっていました。

その大きなとらは、二ひきのひようがおりの中へいれられたのを見ると、とてもこわい目で、こちらをにらみつけていましたが、まもなく、のっそりとたちあがって、たけしくんときみ子ちゃんのばけているひようのほうへちかづいてきました。たけしくんもきみ子ちゃんも、あまりのこわさに、きがとおくなりそうでした。

ふたりは、だんだんうしろへさがって、おりのすみにぴつたりとからだをくつつけましたが、もうそれいじょうはにげられません。

とらは、のっしのっしとちかよってきます。

そして、らんらんとかがやく目で、ふたりをにらみつけ、きばのある、まっかな口が  
つとひらきました。

「ウォーツ……」

おりがびりびりふるえるような、おそろしいうなりごえでした。

そして、とらのまっかな口が、ふたりのあたまの上から、ぐうつとちかづいてきました。  
ああ、もうだめです。ふたりは、いまにもとらにくわれてしまうのではないでしょうか。

「たすけてくれえっ……」

たけしくんは、しにもものぐるいのこえでさけびましたが、けがわをかぶっているの  
そのこえが、どこまでとどいたかわかりません。きよろきよろそのへんをみまわしても、  
きよくげいしのふくをきた、ふしぎな人は、どこへ行ったのか、すがたがみえません。

だれも、たすけには来てくれないのです。

とらの口は、たけしくんのかぶっている、ひょうのあたまの耳のそばにちかづき、あつ  
いきが、耳のあなから、たけしくんのかおにふきつけられました。

とらは、耳たぶにくいついたのかもしれない。

そうして、一ふりされたら、ひょうのあたまがすつとんで、たけしくんのかおがでてしまします。

ひょうのけがわの中から、にんげんの子どもがとびだしたら、とらは、いつそうおどろいて、たけしくんのかおにくいつくにきまっています。

ああ、もうだめです。いよいよたべころされてしまうのです。

そうおもって、たけしくんがきをうしないそうになっていたときです。

「おい、しんぱいしないでもいいよ」

どこからか、へんなこえがきこえてきました。

びっくりしてみまわしても、どこにもにんげんなんていないのです。

とらが、にんげんのことばをしゃべったとしかおもわれません。そんなばかなことがあるでしょうか。

たけしくんはじぶんのあたまがへんになったのではないかとおもいました。きがちがつたのではないかと、ぞつとしました。

すると、そのとき。また、耳のそばで、にんげんのこえがきこえました。

「わしもにんげんだよ。にんげんが、とらのけがわをかぶってばけているんだよ。きみた

ちとおんなじことさ」

やっぱり、とらがしやべっていたのです。

いや、とらのけがわの中にいるにんげんがしやべっていたのです。

「なあんだ、ほんとうのとらじやなかったのか」

たけしくんは、あまりのことにつくりして、そこへたおれてしまいました。

はりつめていたきもちが、一ぺんにゆるんだのです。

とらは、きみ子ちゃんの耳にも、おなじことをささやきました。

きみ子ちゃんは、それをきくと、わつとなきだしてしまいました。

いままでは、なくこともできないほどこわかったのです。

そのときです。

ピシツ、ピシツと、ちゆうをきるむちのおとがひびきました。

いつのまにか、きよくげいしのすがたをした、ふしぎな人が、おりのまえにたっていました。

「びつくりさせてすまなかつたね。これが、まほうの国のどうぶつえんなのだよ。

さあ、みんなおりからだしてやるよ。」

そして、みんなで、もうじゅうのきよくげいをやるんだ」

そういって、むらさきビロードのふくをきた、ふしぎな人は、ライオンやとらやくまのおりをつぎつぎとまわって、そのとびらをひらくのでした。

ライオンやとらやくまが、おりからとびだして、へやの中をのそのそとあるきはじめました。たけしくんやきみ子ちゃんも、おりのそとにでました。

「だいじょうぶだよ。みんな、もうじゅうのけがわの中ににんげんがはいっているんだからね」

とらが、たけしくんたちの耳にささやきました。

でも、むこうからやって来るライオンをみると、たけしくんたちは、おもわずからだがふるえるのでした。

ライオンの大きなおが、すぐそばへちかよりました。そして、がっと口をひらいて、ウオーツ……とうなってから、やさしいにんげんのこえで、

「あんしんおし。ぼくもにんげんだよ。きみたち二ひきは、かわいいぼうやとじょうちやんだってな。なかよくしようね」

ライオンは、そういって、えへへ……とわらいました。

ピシツ、ピシツ……。

むちのおとがなりひびいて、ふしぎな人が、ひろいへやのまん中にたちました。

すると、ライオンもとらもくまも、みんなたちどまって、ふしぎな人のほうをじつとみるのでした。

「さあ、いつものきよくげいだ。ライオンの上にくま、とらの上にひょうがのるんだ」

ライオンのせなかにくまがよじのぼって、あと足でたちました。

一ぴきのとらのせなかにたけしくんのひょうが、もう一ぴきのとらのせなかにきみ子ちやんのひょうが、あぶなつかしくあと足でたちました。

ピシツ……と、むちがなります。

すると、くまをのせたライオン、ひょうをのせたとらたちは、ふしぎな人のまわりをぐるぐるまわってはしりはじめるのでした。

どこからか、おんがくがきこえてきました。きつと、でんちくがなっているのでしょうか。そのおんがくにあわせて、ライオンとらは、とつとつとはしるのです。たけしくんたちは、だんだんおもしろくなってきました。

それから、いろいろなきよくげいがつづきました。

ああ、まほうの国のどうぶつえんのおもしろさ。たけしくんもきみ子ちゃんも、ゆめでもみているようなおもいでした。

しかし、ふしぎな人のせいようかんには、まだまだもつとふしぎなものがありません。たけしくんたちは、このつきには、いったいなにをみせられるのでしょうか。

## 5

さんざんあそんだあとで、林さんは、どうぶつにばけている人たちに、かわをぬいで、じぶんのへやへ行つてやすむようにいいつけました。

それから、たけしくんときみ子ちゃんに、ひょうのかわをぬがせ、べつのへやへつれていって、「ちよつと、ここでまっているのだよ」といって、どこかへでていってしまいました。

しばらくすると、ドアがあいて、きみのわるい人がはいつてきました。

ぴつたりからだにくつついたくろいシャツと、くろいズボンをつけ、手ぶくろもくつも、あたまにかぶったベレーぼうも、みんなくろづくめです。

よくみると、それは林さんでした。いつのまにか、すっかりちがったすがたになって、もどってきたのです。

「しんぱいしなくてもいい。わたしだよ。ただ、ちよつとふくをきかえただけさ。さあ、これからもつとおもしろいものをみせてあげようね」

林さんは、そういつて、にこにこわらいました。

すると、そのとき、あけたままになっていたドアから、一ぴきのさるが、ぴよんぴよんととびこんできました。

そのさるは、林さんのからだにとびついて、耳に口をちかづけ、なにかぼそぼそとささやきました。

それは、さつき、サーカスごっこをしたどうぶつたちの中にいたさるでした。ですから、ほんとうのさるではなくて、さるのかわをきたにんげんです。

それも、あまり大きなさるではありませんから、中にはいつているのは、小さい子どもにちがいません。

さるがなにをささやいたのか、たけしくんたちにはすこしもきこえませんでした。それをきくと、林さんはこわいかおになりました。

そして、

「なにっ、あけちたんていと小林こばやししようねんがやって来たって。そして、けいかんたいが、このうちをとりかこんだというのか。それはほんとうかつ」とどなりました。

「ほんとうです。はやくにげないと、いまにもここへやって来ますよ」

さるが、こんどはかんだかいこえでいいました。やっぱり子どものこえです。

「よしっ。それじゃ、さいごのおくの手だ。あとはたのんだぞ。やつらが来たら、わしはどこへ行つたかわからないというのだ。このふたりの子どもは、わしがつれていく。だいいじな人じちだからな」

くろいすがたをした林さんは、たけしくんときみ子ちゃんの手をひっぱって、へやのそとへとびだしました。

たけしくんたちは、さるのいったことをきいて、たいへんだとおもいましたが、あい手はちからのつよいおとなですから、どうすることもできません。ないても、わめいても、だれも、たすけに来てくれるものはないのです。

林さんは、ふたりの手をひっぱって、ろうかをはしっていきましたが、じきにろうかの

行きどまりまで来てしまいました。

そこには、かべがあつて、もうむこうへ行けませんから、あともどりするのかとおもつていますと、林さんは、足で、かべの下のほうをぐつとおしました。

そこに、ひみつのボタンがあつたのです。

そのボタンをおすと、でんきじかけで、かべがすうつとひらくようになっていたのです。そして、まえのかべに、ぽっかりとくらいあながあきました。

林さんは、たけしくんたちの手をにぎったまま、そのまっくらなあなの中にはいつていきます。

三人が中にはいると、かべは、もとのようにぴったりとしまつてしまいました。

「しんぱいしなくてもいいよ。きみたちをどうもしないからね。さあ、おじさんがだいてやるよ。くらくて、足もとがあぶないからね」

林さんは、そういつて、たけしくんときみ子ちゃんを、りょうわきにかかえるようにしていただきあげたかとおもうと、まっくらなかいだんのようなところをことごととおりはじめました。

いままでいたへやは一かいですから、そこからかいだんをおりれば、ちのそこへはいっ

ていくのです。ちかしつでしようか。

まっくらで、なにがなんだかわかりませんが、林さんは、かいだんをおりたところで、たけしくんたちをおろしました。そして、なにかごそごそやっていました。きゆうに下のほうから、ぱつとひかりがさしてきました。

足の下に、さしわたし五十センチほどの、まるいあながあいて、その下から、あかるいひかりがさしているのです。

「さあ、ここをおりるんだ。このあなの中に、てつのはしごがかかっているから、それをおりなさい。おじさんは、あとからはいるからね」

もうここまで来ては、にげようとしても、にげられるものではありません。

いわれるままにあなの中へおりにいくほかはないのです。たけしくんときみ子ちゃんは、ほそいてつのはしごに足をかけて、あかるいあなの中へおりにいききました。

ひどくせまいへやです。へんなきかいのようなものが、ごちやごちやとならんでいて、どちらへもいけないのです。いったいここはどこなのでしょう。

あたまの上で、パタンとおとがしました。林さんが、てつばしごをおりながら、まるいあなのふたをしめたのです。しめたばかりではありません。あなのまわりについている、

大きなたつのねじをぐいぐいしめつけて、かたくふたをしてからおりてきました。

「はははは……。びっくりしているね。いまにわかるよ」

林さんは、そういつて、ごちやごちやしたきかいの中へはいっていつて、そこにある、小さいすにこしかけました。すると、へやがゆらゆらとうごいて、なんだか、エレベーターにでもものっているようなきもちになりました。

「いいかい。いま、中のでんきをけして、そとのでんきをつけるからね。そうすると、おもしろいものがみえるよ」

しばらくゆらゆらとゆれていたあとで、へやのでんきがぱつときえて、すぐ目のまえの四かくなガラスまどのそとが、ぼうつとあかるくなりました。

ああ、ごらんなさい。そのひかりの中をなん十ぴきという小さなさかなが、ぎんいろのうろこをぴかぴかさせて、およいでいるではありませんか。これは、どうしたというのでしょうか。ここはすいぞくかんなのでしょうか。それとも……。

いやそれはすいぞくかんではありません。もっともっと、びっくりするようなものだったのです。

そのとき、くろシャツにベレーぼうの林さんは、たけしくんたちに、こんなことをいいました。

「おじさんは、ちよつと上へ行つてくるからね。ここにじつとしているんだよ。ちつともこわいことはないからね」

そして、また、へやがゆらゆらゆれて、やがてぴたりとまりました。

すると、まどの外の光がきえて、へやの中のでんとうがつかまりました。

林さんは、あたまの上のまるいあなのしまりをはずして、そこから上へでていきました。あとには、たけしくんたちふたりだけがのこったのです。

ああ、これからどんなことがおこるのでしようか。

林さんのせいようかんには、おおぜいのおまわりさんがふみこんで、へやからへやをさがしまわっていました。

めいたんていあけちごころうと、じよしゆの小林しようねんは、林さんのへやにはいつて、あたりを見まわしました。すると、かべのそばにある、大きなようふくだんすの中で、

コツコツと、みょうな音がしているではありませんか。

あけちたんていは、つかつかと、ようふくだんすにちかづいて、そのとびらをぼっとひらきました。

すると、その中に、ひとりの男がたつていたのです。ぴったりとからだについた、くろいシャツとズボン下に、ベレーぼうをかぶった男。

林さんです。林さんは、いつのまにか、ようふくだんすの中にかくれていたのです。

「ははははは……。あけちくん、ひさしぶりだね。やっと、おれのかくれががわかった、というわけか」

林さんが、みょうなことをいいました。

「そうだ。ぼくは、とうとうかいじん二十めんそうのすみかをつきとめたのだ。それとも、かいじん四十めんそうとよんだほうがおきにいるかね」

あけちたんていは、林さんのかおをまつこうからゆびさしながら、はげしくいいました。ああ、なんということでしょう。たけしくんのおとうさんが、いい人だとあんしんしていた林さんが、きくもおそろしいかいじん四十めんそうだったとは。

このかいじんは、へんそうのだいめいじんで、四十もちがったかおをもっているという

ので、四十めんそうとあだ名されていたのです。まほうつかいのような大どろぼうです。「木村<sup>きむら</sup>たけしくんときみ子ちゃんは、どこにいるのだ。きみは、ふたりの子どもを人じちにして、木村さんのもっている、たくさんのほうせきをとうとうとしているのだ。木村さんが、きみをしんようしているのをいいことにして、ふたりの子どもをさらってしまったのだ」

あちちたんていがいいいますと、四十めんそうの林さんはせせらわらって……。

「そのとおりだ。さすがにあちくくんは目がたかいよ。ははは……」

そのわらい声がだんだんかすかになつて、四十めんそうのすがたは、すうつときえていききました。

あちちたんていは、いきなりようふくだんすの中へふみこみました。

しかし、四十めんそうは、もうどこにもおりません。ゆうれいのようにきえてしまったのです。

あちちたんていは、たくさんさがっているようふくをかきわけて、うしろのいたをさぐっていました。「あつ、ここにかくし戸がある」とさげびました。

そして、力まかせに、そのいたをおしますと、かくし戸がぱつとひらきました。

そのむこうはまっくらなあなです。これも、ちかしつへおりるひみつのぬけ道なのでしよう。

「ピリピリピリピリ……」

小林しようねんが、よび子のふえをふきならしました。それをきいて、おまわりさんがかけつけてきました。

「四十めんそうは、このぬけあなからにげたんだ。みんな、ぼくのあとについてきたまえ」  
あけちたんていは、そうさけんで、くらいあなの中へとびこんでいきました。小林しようねんやおまわりさんも、あとにつづきます。

あなの中には下へおりるコンクリートのかいだんがついていました。

それをおりきると、トンネルのようなよこ道があつて、むこうが、ぼうつとあかるくなつています。

その光の中を、まっくらな人かげがさつとよこ切りました。

「あつ、あそこにいる。あいつが四十めんそうだ」

あけちたんていと小林しようねんと、四人のおまわりさんが、おそろしいいきおいでおかけました。

トンネルをでたところに、ちよつとひろいばしよがあります。四十めんそうは、そこにまちかまえていました。

「ふたりの子どもは、たしかにあずかっている。だが、きみたちには、ぜったいにとりもどせないのだ」

四十めんそうは、そうさげんだかと思うと……。

足もとにひらいていたまるいあなの中にさつとどびこんで、下から、てつのふたをびつたりとしまいでしました。

あけたんていは、「あつ」といって、あなのふちへかけつけました。

すると、てつのふたは、すうつと下へしずんでいって、あとには、くろい水が、ひたひたとさざなみをたてているばかりです。

「あつ、せんこうていだつ」

林さんのひろいやしきは、すみだ川とうきようこうのさかい目の川ぎしにあったのです。ですから、ちかしつの下のほうには、川の水がながれこむようになっていて、そこに小がたのせんこうていがつないであつたのです。

四十めんそうは、たけしくんときみ子ちゃんをつれて、そのせんこうていで、ひろい海

へにげだしてしまったのです。

## 7

あけちたんていは、へやの中へはいつて、すいじょうけいさつへでんわをかけました。すると、とくべつなモーターボートをかしてくれらというへんじでした。

川ぎしでまっつていと、小さいモーターボートが、なみをけたててちかづいてきました。きしにつくと、中から、すいじょうけいさつのおまわりさんがでてきました。

「これは、ちかごろできたばかりの、とくべつなボートです。ボートのそこから、水の中がのぞけるようになっていのです」

おまわりさんはじまんそうにいうのでした。

あけちたんていと小林しょうねんが、そのモーターボートにのりこみました。そして、すぐにとくべつなモーターボートのほうへしゅっぱつしました。

「いま、でんとうをつけますから、ここをのぞいてごらんなさい」

おまわりさんは、そういつて、ボートのその四かくいふたをとりました。すると、そ

こには、四かくいはこのようなものが、下の水の中へつきだして、そのさきにガラスいたがはめてあるのです。のぞいてみると、そのガラスの下が、ぱつとあかるくなりました。

ボートの下に、サーチライトみたいな、つよいでんとうがついていて、水のそこをたすようになっているのです。

すいじょうけいさつでは、川におちた人をさがさなければならぬことがあるのでこういうモーターボートをつくつたのです。

「わあ、きれいだ。さかながたくさんおよいでいる」

小林しようねんがさけびました。

「四十めんそうのせんこうていは、きつと、ペリスコープを水の上にだして、すすんでいくにちがいない。」

そのペリスコープのさきを見つければいいのだ」

あけちたんでいいいますと、すいじょうけいさつのおまわりさんは、すぐにボートのへさきの、サーチライトのスイッチをいれました。

さあつと、つよい光が水の上をてらしました。

そこは、もう、とうきょうのひろい海です。

ボートは、サーチライトを右に左にふりてらしながら、ゆっくりすすんでいきます。

「あつ、先生。あそこにペリスコープのさきが……」

小林しようねんが、むこうをゆびさしてさげびました。

ボートは、ぜんそくりよくで、そのほうへすすみました。

すると、すいめんにていたペリスコープのさきが、すうつと、水の中へかくれてしまったではありませんか。

「あつ、四十めんそうのやつ、きづいたな。よしつ、それじゃ、こんどはすいちゅうめがねだ」

あけちたんていの声にこたえて、ボートのそのサーチライトが、ぱつとすいちゅうめをてらしました。

ボートは、さつき、ペリスコープのかくれたあたりへちかづいていきます。

やがて、ボートのそのすいちゅうめがねに、まっくろなせんこうていのすがたがあらわれました。

「よしつ、この下にいる。どこまでも、こいつのあとをおっていくのだ」

あけちたんていが、モーターボートのきかんしゅによびかけました。

こちらは、せんこうていの中です。

ぴつたりみについたくろシヤツとベレーぼうのかいじん四十めんそうは、ペリスコープのつつに目をあてて、水の上のようすをながめていましたが、ぱつと、サーチライトの光が見え、それがこちらをおっているように思われたので、いそいで、ペリスコープをひきさげてしまいました。

サーチライトの光がつよいので、モーターボートにだれがのっているのか、よく見えませんが、ひよつとしたら、あけちたんていがおっかけてきたのかもしれない、と思いました。

「わははは……。おもしろくなってきたぞ。おい、たけしもきみ子も、いまにびつくりするようなおこるから、まっているがいい。わはははは……」

たけしくんもきみ子ちゃんも、とつぜん、四十めんそうがわらいだしたので、きみがわるくなってきました。ふたりは、だきあうようにして、せんこうていのきかいの中にうづくまっています。

せんこうていは、しばらくのあいだ、ぜんそくりよくで走っていましたが、やがて、だ

んだんおそくなり、ぴったりとまっつてしまいました。

「ぼうやたち、さあ、ついたよ。ここは小さなしまの一つだよ。きしの下をつきぬいて、せんこうていがすつぽりはいれるようにしてあるのだ。そこから、わけなくじょうりくできるようにもなっている。だが、そこへはいるまえに、ちよつとうしろをのぞいてみよう。てきがおっかけてきているんだからな」

四十めんそうはそういつて……。

ペリスコープのつつをすうつと上にあげて、のぞきあなに目をあてました。

「おや、なんにもいないぞ。あけちのやつ、あきらめてひきあげてしまったのかな。いや、まてまて、ゆだんはできないぞ……」

四十めんそうは、ながいあいだペリスコープをのぞいていましたが、いつまでたつてもモーターボートがあらわれないので、やつとあんしんしました。

せんこうていを、きしの下のほらあなにいれ、てつのとびらをひらいて、三人ともじょうりくしました。土のあなからはいだすと、そこは、草ぼうぼうのしまでした。

「ほら、あれをごらん。水のそこから、こんどは空へのぼるんだよ」

四十めんそうのゆびさすほうを見ると、むこうのやみの中に、一だいのヘリコプターが

とまっているのが、かすかに見えました。

## 8

あたりはまっくらです。やみに目がなれると、むこうのほうに、ヘリコプターがとまっているのが見えました。

「あれにのるんだよ。そして、いいところへ行くんだ」  
四十めんそうは、そういつて、ふたりの手をひいて、ヘリコプターにちかづいていきました。

ヘリコプターのそうじゆうせきには、四十めんそうのぶかの男がのつていて、いつでもとべるようになっていました。

三人は、ヘリコプターにのりこみました。すると、ブルンブルンと、プロペラがまわりだし、ヘリコプターは、しずかにじめんをはなれて、空にうきあがりました。

ヘリコプターは、しまの上をはなれて、やみの中を、どこともしれずとんでいきます。ちかくのはねだひこうじょうのあかるいでんとうが、だんだんうしろへとおぎかかっていき

ます。

しばらくすると、四十めんそうが、びっくりしたようにさげびました。

「おやつ、どうしたんだ。なぜ、もとへもどるんだ」

見ると、いちどとおぎかったはねだひこうじょうのでんとうが、また、ちかづいてきたのです。ヘリコプターは、もとへもどってきたのです。「よういができたからですよ」

ヘリコプターをそうじゅうしているぶかの男が、みようなことをいいました。

「えっ、なんだって。なんのよういができたというんだ」

「きみをつかまえるよういができたんだよ。ほら、この下を見たまえ」

いつのまにか、ヘリコプターは、もとのしまにもどっていました。そして、そこには、モーターボートから、もちだしたたんしようとうが、あかるい光をなげ、その中に、おおぜいのおまわりさんがたっているのが見えました。

四十めんそうは、「あっ」とおどろいて、そうじゅうしている男のせなかを見つめました。

「き、きみは、なにものだ」

「ははははは……。ぼくはあけちだよ。きみよりさきに、このしまにじょうりくして、き

みのぶかにばけてまっていたのさ」

ほんとうのぶかは、手足をしぼり、さるぐつわをはめて、草むらの中へころがしておいたのです。

そして、その男の上<sup>うわ</sup>ぎをき、とりうちぼうしをかぶって、四十めんそうのぶかにばけていたのです。

「き、きさま、どうするか見ろっ……」

四十めんそうは、りよう手をひろげて、あけちたんでいのうしろからおそいかかろうとしました。

そのときです。ヘリコプターのすみにおいてあつた大きなにもつが、むくむくとうごきだしたではありませんか。

そのにもつの中から、ひとりのしようねんがあらわれました。

「おいつ、四十めんそう、手をあげるんだ。そうでない……」

しようねんは、ピストルを四十めんそうのせなかにあてて、ぐいぐいとおしつけるのでした。

四十めんそうは、思わずりよう手を上にあげてふりむきました。

「あつ、きさま、小林だなっ」

それは、あけちたんていのじよしゆの小林しようねんだったのです。

さすがの四十めんそうも、ピストルをつきつけられてはどうすることもできません。そのまま、ヘリコプターは、しまにちやくりくしました。

まちかまえていたおまわりさんたちが、四十めんそうをつかまえて、パチンと手じょうをはめてしまいました。

四十めんそうは、おまわりさんたちにとりかこまれて、モーターボートにのせられました。

あけちたんていと小林しようねんは、ヘリコプターの中でふるえているたけしくんときみ子ちゃんをたすけて、おなじモーターボートにのりこみました。

ふたりの子どもを人じちにして、木村さんのほうせきを手にいれようとした四十めんそうは、とうとうつかまってしまったのです。

モーターボートは、しまをはなれて、とうきょうこうから、すみだ川のほうへすすんでいきました。

四十めんそうは、手じょうをはめられて、ボートのかんぱんにうづくまっていました。

そのまわりをおまわりさんがとりかこんでいます。

「おい、きみたち、おれが海の中へとびこんだら、どうするつもりだ」

四十めんそうが、みようなことをいいました。

「そりや、だめだよ。手じようをはめられては、およげやしない。海のそこへしずんでしまえばかりだよ」

おまわりさんがさういうと、四十めんそうは、いきなりわらいました。

「あはははは……。この手じようかい。こんなものはずすの、わけないよ。おれが、手じようやぶりのめいじんだということをしらないのか」

パチンと音がして四十めんそうのりよう手から、手じようがはずれてしまいました。そして、あつというまに、四十めんそうのすがたは、かんぱんからきえていました。

まっくらな海の中へとびこんでしまったのです。

## 二十めんそうのゆくえ

かいじん四十めんそうは、夜の東京港で、水すいじょう上けいさつのモーターボートの上から、海の中にとびこんで、そのままゆくえ知れずになってしまいました。

かいじん四十めんそうのものと名は、かいじん二十めんそうです。あるとき、自分は、二十どころではなく、四十ものちがった顔をもっている、四十人のまつたくちがった人に化けることができるというので、四十めんそうと名まえをかえたのですが、世間せけんには、二十めんそうのほうか、よく知られていますので、このお話では、二十めんそうの名でよぶことにしましょう。

さて、この二十めんそうは、いったいどこへかくれてしまったのでしょうか。二十めんそうほどのやつですから、海でおぼれ死んだはずはありません。どこかへおよぎ着いて、身をかくしたにちがいないのです。

しかし、二十めんそうにつれ出された、木村たけしくんときみ子ちゃんが、ぶじに帰ってききましたので、木村さんのおうちでは、おとうさんもおかあさんも、大よろこびです。

「たけしも、きみ子も、ずいぶんおそろしいめに会ったね。だが、もうだいじょうぶだよ。

二十めんそうは、どこかへかくれてしまつて、二度とこの家にはやつて来ないだろうからね」

たけしくんときみ子ちゃんのおとうさんの木村さんは、ふたりの頭をなでながら、ここにこしているのですた。

「こわかつたよ。でも、おもしろかつたね、きみちゃん。ヘリコプターに乗つたし、モーターボートに乗つたし……。モーターボートは、はやかつたねえ。さあつと水を切つて走るんだよ。あんまりはやいので、ぼく、もうすこしで、気が遠くなりそうだった」

「でも、わたし、おそろしかつたわ。もうむちゆうで、なにがなんだか、わからなかつたわ」

きみ子ちゃんは、おびえた顔でいふのでした。

「そうだろう、そうだろう。ほんとうにひどいめに会つたね」

木村さんは、かわいいきみ子ちゃんをだきしめて、なぐさめてくださるのでした。

☆

☆

それから一月ほどたつたあるばんのこと、名めいたんていあけちこごろう明智小五郎から、木村さんに、電話がつかつてきました。

「しきゆう、お話ししたいことがありますので、わたしのじむ所しよまで、おいでねがえませんか。こちらからうかがうといいのですが、ちよつと、わけがあつて、じむ所をはなれることができないのです」

木村さんは、それを聞くと、すぐに自動車の用意をめいじました。明智たんていは、たけしくんときみ子ちゃんを助けてくれた大おんじんですから、来てくれといわれれば、いやとはいえないのです。

自動車は、自家用車です。うんてん手は、まだおよめさんのないひとり者で、木村さんの家に住みこんでいたのですが、つい四、五日前、国の親が病氣だといってひまを取つて歸つてしまいましたので、新しいうんてん手をやとつたばかりでした。

この新しいうんてん手も、二十八さいのひとり者で、やっぱり、木村さんの家に住みこんでいるのです。名まえは、栗田くりたというのでした。

木村さんは、その栗田のうんてんする車に乗つて、急いで、明智たんていじむ所へ出かけていきましたが、二時間ほどすると、もどつてきました。そのときは、もう、夜の十一時でした。

たけしくんや、きみ子ちゃんは、とつくにねてしまいましたが、おかあさんが、書生しよせい

といつしよに出むかえて、心配そうに、木村さんにたずねました。

「あなた、どんな用でしたの。もしや、二十めんそうが……」

「うん、そうだよ。二十めんそうが、またなにかたくらんでいるらしいのだ。それについて、明智さんから、うちのほうせきを用心するようにと、いろいろ、細かい注意をされてきたのだ。いやなことだな。なんという、しゅうねん深いやつだろう」

おかあさんの顔が、さつと青くなりました。ああ、また、あのおそろしいやつがやって来るのかと思うと、からだがふるえだしてくるのです。

## おそろしい目

そのあくる日から、木村さんの家には、げんじゆうな見はりが立ちました。木村さんのところのふたりの書生と、うんでん手の栗田のほかに、明智たんていのぶかだというふたりの男がやって来て、五人で、かわるがわる、昼も夜も、木村さんの家のうち外を見回って歩くのでした。

たけしくんときみ子ちゃんは、それを聞いて、ふるえ上がってしまいました。また、あ

んなめに会うかもしれないと思うと、おそろしくてたまりません。

たけしくんときみ子ちゃんちゃんの学校へ行くときは、書生がついていくことになりました。それに、昼間のにぎやかな町を通るのですから、学校の行き帰りは、まず、だいじょうぶでした。

おとうさんの木村さんは、ひとま一間にとじこもったきりで、なにか考えごとをしていて、ごはんも自分のへやに運ばせ、茶の間には、すがたを見せないのです。

ですから、たけしくんやきみ子ちゃんは、おとうさんの顔を見ていません。

ところが、おとうさんが、明智たんでいじむ所へ行つてからふつかめのことです。

たけしくんは、夜おそく、お手あらいへ行つた帰りに、ろうかで、ひよっこり、おとうさんに出会いました。

おとうさんは、わふくすがたで、うす暗いろうかを、こちらへ歩いてきたのですが、たけしくんのすがたを見ると、はつとしたように立ち止まって、じつとたけしくんの方を見つめているのです。

たけしくんも、それにつられて立ち止まってしまいました。そして、こちらも、じつとおとうさんの顔を見つめました。

木村さんの目は、おそろしくきらきら光っていました。ぞっとするような、こわい目です。

それは、おとうさんにちがいないのですが、なんだか、えたいの知れないかいぶつにも出会ったようで、すこしも親しみがなく、ただ、おそろしいばかりでした。

たけしくんは、しばらくにらみあっていたあとで、そのままのもいわないで、にげるように自分のへやへかけこんでしまいました。

「へんだなあ。おとうさんが、あんなおそろしい顔をしているのは、はじめてだ。おとうさんは、病気なのかしら。それとも……」

たけしくんは、ベッドにはいつて、そのことばかり考えていました。あのおとうさんのこわい目が、どうしてもわすれられなかったのです。考えているうちに、だんだんおそろしくなって、からだが、がたがたふるえてくるのでした。

そのあくる日、たけしくんは、学校へ行っても、おとうさんのこわい目のことばかり考えていました。

学校から帰っても、やっぱりおとうさんのことが気にかかるので、そっと、おかあさんにたずねてみますと、おかあさんも、へんな顔をして、

「パパは、しよさいにいますよ。どうなすったのかしら。だれも来てはいけないうて、へやをしめ切つて、とじこもつていらつしやるのよ」といわれるのでした。

たけしくんは、しよさいへ行つてみました。そして、ドアの外から、「パパ」とよんでみました。しかし、返事がありません。ドアをあけようとしたが、中からかぎがかけてあるらしく、すこしも動きません。

「パパ……、パパ……」

二度も三度もよびましたが、なんの答えもありませんので、たけしくんは、ドアのかぎあなに目を当てて、中をのぞいて見ました。

すると、しよさいにおいてある金庫の前にうずくまっているおとうさんの後ろすがたが見えました。

金庫のとびらが、開いています。そのとき、おとうさんが、すこしよこ向きになったので、手に持っているものが見えました。それは、金色のほうせきばこでした。そのはこが開いて、美しいほうせきが、きらきらとかがやいているのが、こちらからも見えました。

なんだか、へんです。おとうさんが、まるでどろぼうみたい、人目をしので金庫を

開き、ほうせきばこを取り出してながめている様子ようすが、どうもへんです。

たけしくんは、それを見て、はつとしたひょうしに、思わず、カタツと音をたててしまいました。

すると、その物音を聞きつけたおとうさんが、ひよいとこちらを向いたのです。

ああ、その目……。

へびのような、きみの悪い目が、ドアのかぎあなを見つめているのです。その外から、たけしくんがのぞいていることを、ちゃんと知っているのかもしれない。

たけしくんは、ぞうつとしました。おとうさんが、あんなきみの悪い目をしているはずがないと思いました。ひよつとしたら、あれは、ほんとうのパパではなくて、なにかおそろしいものが、パパに化けているのではあるまいかと思いました。

たけしくんは、そのまま、かぎあなの前をはなれて、自分のへやにげ帰りましたが、むねがどきどきしました。けれど、このことは、だれにも話せません。おとうさんが、ものだなんて、きみ子ちゃんにも、おかあさんにも、いえないのです。たけしくんは、どうしたらよいのか、わけがわからなくなりました。

たけしくんのおとうさんは、いったい、どうしたのでしょうか。まものにみいられたとで

もいうのでしょうか。それとも……。

そこには、じつにおそろしいひみつがかくされていたのです。

そのひみつが、少年たんでいだんの力でわかつてくるのです。そして、いよいよ、名たんでい明智小五郎や小林少年の大かつやくが始まるのです。

## 10

ポケット小<sup>こ</sup>ぞう

かいじん二十めんそうが、たけしくんときみ子ちゃんのおとうさんのほうせきをねらっているというので、たけしくんの家では、いつも、げんじゆうな見はりがついていました。木村さんの書生がふたり、うんでん手の栗田、それから、明智たんでいのぶかの男がふたり、ぜんぶで五人が、こうたいで、家の外と中を見回っているのです。

木村さんは、一間にとじこもったきり、なにか考え事をしていきます。おとうさんの、そ

んな様子を、たけしくんは、ふしぎに思いました。

いつものおとうさんと、まるでちがっているのです。

ゆうべ、夜おそく、手あらいに行つたとき、ろうかで、おとうさんに出会いましたが、おとうさんは、ものもいわないで、おそろしい目で、たけしくんをにらみつけました。

おとうさんのそんなおそろしい目を見たのははじめてなので、たけしくんは、すっかりおびえてしまいました。

そのほかにも、まだ、いろいろあやしいことがあつたのです。

たけしくんは、そのあくる日の夕方、ひとりで、門の外に立っていました。おとうさんの様子を考えると、じつとしていられないような気持きもちになつたからです。

門の前に立つて、だんだん暗くなつていく夕ぐれの町を、ぼんやりとながめっていると、向こうの町かどに、ひよいと人のすがたがあらわれました。中学の二年か三年ぐらいの少年です。

その少年が、こちらを見て、手まねきしているのです。

「ぼくですか……」

たけしくんは、思わず、大きな声で聞き返しました。

すると、少年は、しつ、というように、口の前に指を立てて、そつと、こちらへ近づいてきます。にこにこした、上品な少年です。たけしくんも、思わず、その方へ歩いていきましました。

「あつ、小林さん……」

たけしくんは、なつかしそうに、少年のそばにかけよりました。

それは、名たんでい明智小五郎の助<sup>じよしゆ</sup>手の小林くんだったのです。ヘリコプターの中にかくれていて、たけしくんたちを助けてくれた、あの小林くんだったのです。

「きみが、どうしているかと思つて、様子を見に来たんだよ。べつに、かわつたことはないかい」

そこで、たけしくんは、おとうさんが明智たんでいじむ所へ出かけていったこと、帰ってきてから、まるで人がかわつたように、ものをいわなくなったこと、一間にとじこもつて、こわい顔をしていることなどを、小林くんに話しました。

小林くんは、これを聞くと、じつと考えていましたが、やがて、

「これには、なにか、わけがあるらしいね。よしつ、ぼくは、すぐにじむ所へ帰つて、明智先生にそうだんする。そして、きみたちをまもつてあげる。ちつとも心配することはな

いよ」

といって、たけしくんのかたをたたくと、そのまま、夕やみの中へかけだしてしまいました。

それから、一時間ほどたつたところです。あたりは、もう、すっかり暗くなっていました。木村さんの家のへいの外を、黒いものが、ちよろちよろと動いていました。

暗くてよくわかりませんが、なんだか、六つか七つぐらいの小さな子どものようでした。その子どものすがたが、まだ開いたままの木村さんの門の中へ、すうつと、すべりこむようにはいつていきました。

その子どもは、いったい、なに者だったのでしよう。むろん、小林くんではありません。もつと、ずつと小さい子どもです。

あつ、そうです。少年たんでいだんの、ちんぴらたいのポケット小ぞうにちがいありません。

ポケット小ぞうというのは、ポケットにはいるほど小さいというので、こんなあだ名をつけられたのですが、からだは小さいけれども、じつにすばしっこい、りこうな少年です。そのポケット小ぞうが、木村さんの家へしのびこんだのです。

かれは、いったい、なにをするつもりなのでしょうか。

### きえたほうせき

さて、その夜の八時ごろのことでした。しよさいにとじこもっている木村さんのところへ、どこからか電話がかかってきました。

木村さんは、その電話を聞くと、顔色をかえて、ガチャンと受話じゆわきをかけ、あわてて、よびりんをおすのでした。

けたたましいベルの音に、ふたりの書生がかけつけました。

「はい、なにかご用ですか」

「すぐに、明智たんていじむ所の人をよんでくれ。二十めんそうだ」

「えっ、二十めんそうが……」

「二十めんそうが、電話をかけてきたのだ。早くよんでくれ」

書生が、急いで、明智たんていのぶかの、ふたりの男をつれてきました。

「木村さん、二十めんそうから電話がかかったそうです」

ぶかのひとりが、いきせき切って、たずねました。

「そうです。あいつからかかってきたのです」

「どんなことをいつてきたのですか」

「今夜<sup>こんや</sup>、わたしのほうせきを取りに来るといのです」

「えっ、今夜、ほうせきを」

「そうです。わたしのほうせきは、ぜんぶ、ほうせきばこにおさめて、その金庫に入れてあります。それを、今夜の十時きつかりに、ぬすみ出してみせるといのです」

「そんなばかな。そんなことができるはずはありません。わたしたちがふたり、書生さんがふたり、うんてん手の栗田くん、それに、木村さんをくわえて六人です。六人が、このへやでがんばって見はつていれば、いくら、かいじん二十めんそうでも、ぬすみ出せるわけがありません」

「わたしも、電話で、そういつてやったのです。すると、二十めんそうはせせらわらいました。そして、見はりが多ければ多いほど、おもしろい。いくら見はつていても、かならずぬすみ出してみせるといつて、電話を切ってしまいました。まほう使いのようなやつですから、ゆだんできません」

木村さんは、青ざめた顔で、心配そうにいうのでした。

それから、六人の見はりが始まりました。だれも、へやを出るものはありません。六人とも、いすにかけて、じつと金庫を見つめています。

まどは、ぜんぶしめて、かけ金をかけ、二つのドアも、げんじゆうにしめて、中からかぎをかけてしまいました。

「しかし、木村さん。ほうせきは、たしかに金庫の中にはいつているのですか。もう、とつくに、ぬすまれているのではありませんか」

明智たんでいのぶかが、うたがわしげにいいました。

「ねんのために、しらべてみましょう」

木村さんは、そういつて、かぎで金庫を開き、金色のほうせきばこを取り出して、テーブルの上におきました。

「はこはあつても、中のものがなくなっているかもしれない。開いてみます」

木村さんが、ほうせきばこを開くと、その中の黒いビロードのぬのの上に、首かざり・うでわ・指わ・耳かざりなどにちりばめた、ダイヤモンド・ルビー・サファイア・エメラルド、そのほか、あらゆるほうせきが、きらきらとかがやいているのでした。

「一つもなくなつてはいません。では、元のように、金庫の中におさめます」

木村さんは、ほうせきばこのふたをしめ、それを金庫の中にしまつて、かぎをかけました。

そして、また、六人は、じつと金庫を見つめていましたが、やがて九時になり、九時半になり、九時五十分となり、とうとう十時になりました。

「いま、ちょうど十時です。二十めんそうは、やつて来ませんでしたね。もう、だいじょうぶです」

明智たんでいのぶかがいいますと、

「いや、まだ安心はできません。あい手は、まほう使いですからね。ひとつ、金庫を開いて、あらためてみましょう」

木村さんは、そういうと、金庫の前へ行つて、かぎで、とびらを開き、金色のほうせきばこをテーブルの上に持つてきて、そのふたを開きました。

「あつ」

みんなの口から、おどろきのさけび声が、ほとばしりました。

ごらんなさい。——ほうせきばこの中は、すっかりからっぽになっているではありません

んか。ああ、これは、いったい、どうしたのでしょうか。

## 二

## 黒いおぼけ

たけしくんと、きみ子ちゃんのおとうさんの木村さんは、金庫の中から、ほうせきばこを取り出して開いてみますと、中は、からっぽになっていました。

二十めんそうが、いつの間にか、ぬすみ出してしまったのです。

木村さんのほかに、明智たんていのぶかや、書生や、うんてん手など、五人の人が、そのへやの中で、目をさらのようにして見はつていたのです。その目の前で、ほうせきが、ほうせきばこの中からきえうせてしまったのです。いったい、二十めんそうは、どんなまほうを使ったのでしょうか。

木村さんをはじめ、みんなは、あまりのふしぎさにぼんやりしてしまって、金庫の前に

つつ立っていました。

すると、そのときです。大きな金庫の後ろから、ぴよんと、まっ黒なものがとび出してきました。小さなお化けです。まっ黒なシャツとズボンをつけ、頭は、黒ふくめんです。目と口のところだけ、あながあいています。頭のとっぺんから足のつま先まで、まっ黒な子どもみたいなやつです。

その小さなお化けが、ぴよん、ぴよんと、木村さんにとびかかってきました。そして、すばやく、木村さんのうちポケットに手を入れたかと思うと、中から、ぴかぴか光るものをつかみ出して、ぱつと、向こうへとびのいてしまいました。

「ほうせきは取りもどしたから、安心しな。さあ、こいつをつかまえるんだよ。こいつは、ほんとうの木村さんじゃない。二十めんそうが化けているんだよ。早く、こいつを……」  
黒いお化けが、子どもの声でさげびました。

しかし、みんなは、そんなお化けのいうことはしんようできないので、ためらっていません。木村さんが、いきなり、かけだして、へやの外へ出ていってしまいました。

「あつ、にげた。早く追っかけるんだ」

小さなお化けが、またさげびました。

みんなは、木村さんがにげだしたのを見ると、お化けのいうことがほんとうだ、と思いました。それに、木村さんのうちポケットから、ほうせきが出てきたのが、なよりのしようです。みんなは、二十めんそうが、どんなものにも化けられる、へんそうの名人だったことを思い出したのです。

みんなは、へやの外へかけ出しました。そして、表門やうら門の外までしらべましたが、木村さんにへんそうした二十めんそうのすがたは、どこにも見えません。

「へんだなあ。そんなに早くにげられるはずがない。どこか、家の中にかくれているんじゃないかな」

明智たんでいのぶかが、小首こくびをかしげて、いいました。

「そうだ、家の中にかくれているんだ。門の外の町はずっと見通しなのに、どこにもないんだから、外へにげたとはい考えられない。きっと家の中だよ」

「それにしても、あの黒いお化けは、いったいなにもものだろう」

「うん、そうだ。あいつのほうせきを取り返さなけりゃあ」

そこで、黒いお化けをつかまえて、しらべてみますと、

「おれ、ちんぴらたいのポケット小ぞうだよ。小林さんのめいれいで、こんな黒いシャツ

を着て、金庫の後ろにかくれていたんだ。おいらみたいな、小<sup>ちい</sup>ちやい子どもでなけりや、はいれはしないよ。だから、二十めんそうもゆだんしていたんだよ。さあ、これ、返すよ」といって、さつき、二十めんそうから取りもどしたほうせきを、明智たんていのぶかに手わたすのでした。

「それにしても、あいつ、いつの間にはうせきを取り出したのかなあ。ぼくたちは、ちゃんと見はつていたんだが……」

「あいつは、手品使いだよ。ほら、一度、金庫をあけて、ほうせきばこの中にほうせきのはいつているのを、たしかめただろう。あのときだよ。金庫の前にしゃがんで、ほうせきばこをもどすときに、すばやくほうせきだけをぬき取って、うちポケットに入れてしまったのさ」

黒いお化けのポケット小ぞうがせつめいしました。

## 金色のとら

それから、家じゅうのそうさくが始まりました。

明智たんていのぶかがふたり、書生がふたり、自動車のうんてん手、それに、黒ふくめのままのポケット小ぞうもくわわって、六人が二組に分かれて、ろうかからろうかへ、へやからへやへと、さがし回るのでした。

しかし、木村さんに化けた二十めんそうは、どこにもいません。もう、さがすところがないのです。

「あつ、このおし入れ、まだあけてみなかつたね」

ポケット小ぞうが、ろうかのおし入れの前に立ち止まって、そつとささやきました。

「うん、まだだ。あけてみよう」

明智たんていのぶかが、おし入れの戸に手をかけて、そつと開きましたが、開いたかと思うと、

「わあっ……」

とさけんで、あとじさりをしました。

おお、ごらんなさい。一頭の大きなとらが、ぬうつと、あらわれてきたではありませんか。

黄色いからだに、太い、まつ黒なしまがついています。その黄色いところが、金色に光

っているのです。らんらんとかがやく二つの目が、じっと、こちらをにらんでいます。

家の中に、とらがいるなんて、なんとという、ふしぎなことでしょう。まるで、考えてもみなかったことです。

みんなは、あまりのおそろしさに、立ちすくんだまま、どうすることもできないのでした。

金色のとはは、ゆうゆうと、おし入れの中から出てきて、のそりのそりと歩きだしました。

そして、みんなのそばを通りすぎると、にわかには足を早め、いきなりかけだして、ろうかの向こうへまがついて行ってしまいました。

ここは、たけしくんと、きみ子ちゃんの新しつ（ねるへや）です。

さつき、書生さんが来て、二十めんそうが、家の中にかくれているといったので、ふたりは、こわくてしかたがありません。ベッドから出て、パジャマを着たまま、へやのすみっこで、たがいのからだをだきしめて、ぶるぶるふるえながら、立っていました。

すると、入口のドアが音もなく、すうっと開いたのです。そして、そのすき間から、金色に光るものがあらわれてきたではありませんか。

とらです。びつくりするほど大きな、金色のとらです。

ふたりは、あまりのふしぎさに、ゆめでも見ているのではないかと思いました。しかし、ゆめではありません。生きたとらが、ほんとうに、しんしつの中へはいつてきたのです。

大とらは、へやにはいると、あと足で立って、前足で、かぎあなにさしたままになっ  
ているかぎを、カチンとかけてしまいました。

ふたりは、もう、にげ出すこともできないのです。

金色のとらは、ふたりの方へ、のそりのそりと近づいてきました。

さて、みなさん、これから、いったい、どんなことが起こるのでしよう。たけしくんと  
きみ子ちゃんは、この大とらに食われてしまうのではないでしょうか。

それにしても、家の中にとらがいたなんて、じつにふしぎです。これには、なにかわけ  
があるのにちがいありません。そのわけとは……。

## わらうとら

ふたりは、それを見ると、きやあつといつて、だきあつたまま、たおれるようにしやがんでしまいました。

「うふふふ……」

そのとき、へんなわらい声が聞こえてきました。へやの中からです。へやの中には、とらのほかに、だれもいません。では、とらがわらったのでしょうか。

ああ、わらうとら。お化けのようにわらうとら。

たけしくんときみ子ちゃんは、ぞうつとして、気が遠くなるような思いでした。

「うふふふ……。たけしときみ子、しばらくだったなあ。おれがだれだか、わかるかね」  
ふたりは、そのきみの悪い声に、聞きおぼえがありました。二十めんそうです。あいつの声です。

「おれは、へんそうの名人だ。人間ばかりでなく、どんなものにも化けられるんだ。もうじゆうにだって、化けられるんだよ」

まるで、人間のようにな、あと足で立ちあがったとらが、ふたりのかくれているかべの間をのぞきこみました。

「うふふふ……。こわがらなくてもよい。おまえたちにかみつくわけじゃない。

ざんねんながら、おれはしつぱいしたんだ。ポケット小ぞうに、ほうせきを取り返されてしまった。そして、追っかけられたのだ。そういうときの用意に、おれは、とらの皮を、おし入れの中にかくしておいたんだ。それを着て、みんなをびつくりさせて、そのまに、にげだしたのだ。おれは、けっしてつかまりはしないよ。

ところで、きみたちについておくが、おれは、きみたちのおとうさんに化けて、ほうせきをぬすんだ。だから、ここのうちには、きみたちの、ほんとうのおとうさんはいないのだ。

どこにいると思うね。うふふ……。ある場所にかくしてある。そして、おとうさんと引きかえに、ほうせきをもらうつもりだよ。

わかったかね。おとうさんを返してほしかったら、ほうせきをおれにわたすように、みんなにたのむのだ。ほうせきを、いつ、どこへ持ってくればいいのかは、あとで知らせるよ。わかったね。じゃあ、あばよ」

とらは、それだけのことをいつてしまうと、あと足で、まどのところへ歩いていき、ガラス戸を開いて、まっ暗なにわへ、ぴよいとどび出していつてしまいました。

### ふしぎなろうじん

木村さんのうちの近くに、こうしゅう電話が立っていました。そこは、やしき町と、しようにんがい（店のたくさんある町）とのさかい目になっています。

もう、夜ふけでしたから、町は、ひっそりとして、人通りもないように見えたが、その暗い町を、コツコツと、くつ音をたてて、ひとりの大学生が歩いてきました。

ふと、大学生は、びつくりしたように立ち止まりました。そして、いきなり、いま来た方向へかけだしました。おそろしいものを見たからです。

向こうの大きなやしきのコンクリートべいから、ぴよいと、地面へとびおりたものがあったからです。それが、思いもかけない、一ぴきの大きなとらだったからです。

とらは、地面にとびおると、あたりを見回してから、こうしゅう電話の方へ、のそのそと歩いていきました。

そして、あと足で、ぬうつと立ちあがると、こうしゅう電話のドアを開いて、中へはいってしまいました。

大学生は、三十メートルほどにげ、町かどに身をかくして、それをのぞいていましたが、東京の町の中へとらがあらわれるなんて、まったくしんじられないことですから、自分の目がどうかしたのではないかと、うたがいました。

こうしゅう電話に近づいて、たしかめてみればいいのですが、そんなゆうきはありません。近くの交番にかけつけて、このことを知らせるほかはないと思いました。

すると、そのとき、木村さんの門の中から、四、五人の人が、あわただしくかけ出してきました。

明智たんていのぶかや、書生たちが、にわににげたとらをさがし回ったすえ、門の外へ出てきたのです。

大学生は、その人たちを見ると、「あつ、あぶないっ」

と思いました。とらにおそわれたらたいへんです。そこで、ゆうきを出して、みんなの方へ走っていき、息を切らせながら、とらのことを話しました。

「えっ、こうしゅう電話ですって」

「ええ、たしかに、あの中へはいりました」

「それじゃあ、外からドアをおさえてしまえばだいじょうぶだ。そして、こうしゅう電話をぐるぐるまきにすれば、おりにとじこめたようなものだ」

明智たんていのぶかたちは、そんなことをいいながら、だいたんに、こうしゅう電話の方へ近づいていくのでした。

けれども、みんなが、おずおずとこうしゅう電話のそばへ来たときです。こうしゅう電話のドアが、中から、ぱつと開きました。

みんなは、あつと行って、にげだしそうになりましたが、ドアをあけて出てきたのは、とらではなくて、ひとりの、しわだらけのおじいさんでした。めがねをかけ、長い白ひげをはやし、古いかたのせびろを着た、弱々しいおじいさんでした。

大学生はびつくりしました。このおじいさんは、よく、とらに食われなかったものだと思いました。

明智たんていのぶかは、あつけにとられながらも、おじいさんの出たあとのこうしゅう電話の中を、そつとのぞいてみました。けれども、ふしぎなことに、その中はからっぽでした。大学生のいったようなとらのすがたなど、どこにも見えないのでした。

白ひげのおじいさんは、うろたえているみんなの顔を見回して、にやにやとわらいました。そして、ひよっこりひよっこりと、みょうな歩き方で、向こうへ立ち去ってしまいました。

## 13

## マンホール

二十めんそうは、大きなとらにへんそうして、木村さんの家のそばにある、こうしゅう電話の中になげこみました。みんなが、そのまわりを取りまいていて、ドアが開いて、中から、ひとりのろうじんが出てきました。そして、さつきとびこんだとは、かげも形も見えません。どこかへきえうせてしまったのです。

みんなは、あつけにとられて、そのろうじんを見送っていましたが、ポケット小ぞうは、明智たんでいのぶかに、なにかささやくと、そのまま、ろうじんのあとをつけていきまし

た。ポケット小ぞうは、ポケットの中にはいるほど小さいといわれている少年ですから、あとをつけるには、つごうがいいのです。

ろうじんは、大きな黒いふろしきづつみを小わきにかかえて、すたすたと歩いていきます。その歩き方が、とても早くて、すこしも年よりらしい様子がありません。

ポケット小ぞうは、気づかれないように、ちよこちよこと、すばやくあとをつけました。「ははん、わかったぞ。あのふろしきの中に、とらの皮が、まるめてつつんであるんだな。こうしゅう電話のはこの中で、それをぬいで、ろうじんのすがたになってあらわれたんだ。あいつは、さつき、木村さんのおし入れの中にかくれたとき、そこに用意しておいたふくや白いつけひげで、ろうじんにへんそうしたんだ。それから、とらの皮をかぶったんだ。だから、とらの皮さえぬげば、すぐにろうじんに化けられたんだ。一分間もかかりやしな。い。二十めんそうのやつ、うまいことを考えたもんだな」

ポケット小ぞうは、そんなことをぶつぶつつぶやきながら、なおもゆだんなく、ろうじんのあとをつけていきました。

ろうじんは、さびしい方へ歩いていきます。夜ふけのことですから、あたりは、まっ暗です。

すると、ろうじんが、立ち止まって、道にしゃがむのが、かすかに見えました。

「おやっ」

と思つて、目をこらしていますと、ろうじんは、大きなまるいものを、地面からひき起こしているではありませんか。

「あつ、わかつた。マンホールの鉄のふたをずらしているんだな」

そうです。ろうじんは、マンホールのふたを開いて、その中へおりていこうとしているのです。

「あの中へかくれるつもりなのかな。だが、おれがつけていることは気がつかないんだから、なにも、かくれることはない。すると、……あつ、そうかもしれないぞっ」

ポケット小ぞうは、そこに気がつきました。

二十めんそうは、とんでもないことを考え出すやつですから、マンホールとそっくりのあなをこしらえて、そこから自分の住みかへ出入りしているのかもしれない。

マンホールだと思えば、だれもあやしまないのですから、こんなによいひみつの出入口はありません。

ろうじんは、マンホールにはいると、中から、鉄のふたをしめてしまいました。

ポケット小ぞうは、急いでそこへ行つて、鉄のふたに手をかけてみましたが、子どもの力で動かせるものではありません。

「よし、すぐ、みんなに、このことを知らせよう。そして、明智先生や小林さんと、電話でそうだんするんだ」

そういつて、ポケット小ぞうは、大急ぎで、もと来た方へ、かけだすのでした。

## 動くよろい

ポケット小ぞうの考えたとおり、そのマンホールは、二十めんそうの住みかの、ひみつのマンホールでした。

マンホールの中は、コンクリートのかべにかこまれていましたが、そのかべに、ちよつと見たのではわからない、ひみつのドアがあつて、それを開くと、ずっと、よこあながつづいていて、あるせいようかんのえんの下へ出られるようになっていました。そのこのゆか板が、上げふたになつていて、それをあけて上に出ると、りっぱなへやがあるのです。

ろうじんにへんそうした二十めんそうは、そのへやへ上がつていきました。

「うふふふ。あぶないところだった。だが、おれは、まほう使いだからな。とらに化け、ろうじんに化け、それから、だれも知らないマンホールの入口だ。あいつら、おれがどこかへきえてしまったかと、おどろいているだろうて。うふふふ……」

二十めんそうは、そんなひとり言ひとことをいいながら、広いへやの中を、ぐるっと見回しました。

それは、へんなへやでした。広いせいよう風ふうのへやのかべには、いろいろな形の刀やてつぼうなどがならべてあり、その下には、むかしのせいようのよろいや、日本のよろいや、中国のよろいやなどが、まるで、人が立っているように、ずらっとかぎってありました。びじゅつ品ひんの好きな二十めんそうは、古い刀やよろいやなどを、このへやにかぎって、よろこんでいるのでしよう。

かれは、ドアをあけて、つぎのへやにはいりました。そこは、しんしつらしく、大きなベッドがおいてありました。

そこで、ろうじんのふくをぬぎ、顔のつけひげやかつらを取り、せんめん台で顔をあらひ、ようふくだんすからパジャマを出して着かえてから、よびりんをおすのでした。

すると、ドアにノックの音がして、ひとりのぶかがはいってきました。

「かしら、うまくいききましたか」

「いや、しつぱいした。ちんぴらにじやまをされた。そして、みんなに追っかけられたので、いろんなへんそうをして、うまくにげてきたのだ。だが、あのほうせきは、きつと手に入れてみせるよ。……ああ、くたびれた。今夜は、もう、ねることにしよう」

二十めんそうは、そういつて、ぶかを下からせてから、そのつくえの上においてあったウイスキーをグラスについて、ぐつとのみほすと、そのままベッドにもぐりこんでしまいました。

さて、そのよく朝のことです。八時ごろ、二十めんそうは、目をさましてベッドから出ると、ドアを開いて、よろいのかぎつてあるへやにはいました。毎朝、そのへやを見るのが楽しみなのです。

「どうだ、りつぱなものじゃないか。これだけ、世界じゅうのよろいや刀を集めているやつは、ほかにあるまい。ここまで集めるのには、おれも、ずいぶんくろうしたもんだからな」

二十めんそうは、さもうれしそうに、ひとつひとつ、よろいをながめながら歩き回るのでした。

「おやつ」

二十めんそうは、びっくりして立ち止まりました。すぐそばに立っている銀色のせいよ  
うのよろいが、かすかに動いたように思われたからです。

ふしんに思った二十めんそうが、その銀色のよろいを見ていると、ああ、これは、どう  
したことでしょう。そのよろいが、だんだん大きく動き出して、こちらに歩いてくるでは  
ありませんか。よろいのお化けです。

二十めんそうは、ぽかんと口をあけ、あつけにとられたように立ちすくんでしまいまし  
た。

14

## フエンシング

そのよろいは、銀色にみがいた鉄できています。銀色のかぶとをかぶり、その下に、

銀色のかめんのようなものが見えます。

その大きなよろいが、二十めんそうの方へ、しずかに歩いてくるのです。

「お、おまえは、なに者だつ。よろいの中に、はいつているのは、だれだつ」

二十めんそうは、思わず、かべぎわにあとずさりしながら、どなりつけました。よろいが歩きだすからには、中に、人間がはいつているとしか考えられないからです。

「はははは……。だれだと思うね。この声に聞きおぼえはないかね」

よろいの中から、人間の声が聞こえてきました。

「あつ、それじゃあ、おまえは……」

二十めんそうは、その声に、聞きおぼえがあつたのです。かれは、はっとしたように、顔色をかえました。

「はははは、わかつたかね。そのとおり、きみのてきの明智小五郎だよ」

「どうして、ここがわかつたのだ」

二十めんそうは、ふしぎそうに、聞き返しました。

「きみは気づかなかつたが、ポケット小ぞうが、きみのあとをつけて、マンホールの入口を発見したんだよ。ぼくは、そのマンホールから、はいつてきたのさ。その道には、いく

つも、かぎのかかったドアや上げぶたがあつたけれども、ぼくは、ばんのうかぎを持つて  
いるので、どんなドアでも開くことができるのさ。

そして、このよろいの中へかくれていたというわけだよ」

「うむっ」

二十めんそうは、さもなくやしそうにうなつたかと思うと、いきなり、かべにかけてあつ  
た長いけんを取つて、明智たんに向かつてきました。

しかたがないので、明智たんのほうも、よろいのこしにつるしていた、長いけんを  
ぬきはなつて、二十めんそうのけんをふせぎました。

はげしいきり合いが始まりました。日本のけんどうではなくて、せいようのフェンシン  
グのたたかいです。

名たんていも、二十めんそうも、フェンシングのやり方を、よく知っていました。二十  
めんそうのけんが、明智たんていのむねを目がけて、はげしくつき出されてくるのを、明  
智たんていのけんが、はつしと受け止めて、空中にきりむすぶのです。二本のけんが、目  
にもとまらぬはやさでとびちがうので、まるで、銀色のにじがきらめいているように見え  
ます。

ほんとうのけんですから、さわればきれるのです。しかし、両方とも、あい手をきずついたり、ころしたりする気はありません。ただ、フェンシングのうでまえを、見せあっているのです。

二十めんそうも、なかなか強いけれど、明智たんていは、それよりいつそう強いのでした。

チャリン、チャリンと、銀色のけんがぶつかりあい、そのするどいけん先が、ひよいひよいと、のどやむねにせまってくるのを、明智たんていは、みごとにはね返しています。二十めんそうのこきゆうが、だんだんはげしくなってきました。

そのとき、さつと、つき出した二十めんそうのけんを、明智たんていは、自分のけんで、くるくるとまき返すようにして、ぱつとはねると、二十めんそうのけんは、手からはなれて、てんじょう高く、まい上がってしまいました。

## 二十めんそうのおくの手

二十めんそうが負けたのです。負けたとわかると、かれは、いきなり、まどのところへ

とんでいって、にげ出そうとしました。

「はははは。二十めんそうくん、だめだよ。この家のまわりは、おおぜいのけいかんが取りまいているのだ。とても、にげ出せやしないよ」

明智たんていは、けんを前につきながら、へやのまん中に立って、さもゆかいそうにわらうのでした。

二十めんそうは、まどから、にわをながめました。向こうの木の間に、けいかんが、ふたり、三人、四人と、見はつているのが見えます。

「ちくしよう、すっかり手が回つたな。明智くん、さすがにきみは、ぬかりがないねえ。だが、おれは、いつでも、さいごのおくの手が用意してあるんだ。おれは、にげ出してみせるぞ」

二十めんそうは、さけぶようにいったかと思うと、ぱつとまどにとびつくと、いきなり、空中に向かつてとび上がりました。

すると、ふしぎふしぎ、二十めんそうのからだは、すうっと、空中に上がったまま、落ちてこないではありませんか。二本の足が、まどの上の方に、ぶらんぶらんと、ゆれてい

明智たんていは、まどにかけよって、外をのぞきました。にわの木の間にかくれていたけいかなたちも、まどの下へかけよってきました。

「あつ、屋根だつ。屋根へのぼっていくぞつ」

ひとりのけいかんが、びつくりしたようにさげびました。

ごらんなさい。高い屋根の上から、なわばしごが、まどのへんまでぶらさがっています。二十めんそうは、それにとびついたので。そして、屋根へのぼっていくのです。

これが、かれのおくの手でした。万一のときのために、なわばしごを用意しておいたのです。

しかし、屋根にのぼって、どうしようというのでしよう。となりの家の屋根と、くつついているわけではありませんから、屋根づたいに、にげることはできません。

この家を取りまいていたけいかなたちが、おおぜい、まどの下へ集まってきました。しかし、なわばしごは、ずっと上の方にあるので、地面からとびつくことはできません。さつき、二十めんそうがしたように、まどわくに上がって、そこからとびつくほかはないのです。

明智たんていは、大急ぎで、せいようのよろいをぬぎすてると、身がるなすがたで、ま

どわくに上がり、空中にたれているなわばしごに、きつとどびつきました。

そのときには、二十めんそうは、もう、とつくに、屋根に上がってしまったて、下からは、すがたが見えません。

明智たんていは、なわばしごをのぼりきると、屋根に手をかけました。そして、ひよいと身をおどらせると、もう、屋根の上に立っていました。

急な屋根です。とても、立ったままでは歩けません。たんていは、ほうようにして、てっぺんの方へのぼっていきます。

そのときです。ブルルン、ブルルン、ブルルン……という、ぶきみな音が、屋根のてっぺんの方から聞こえてきました。

おお、おどろくではありませんか。かれのおくの手は、これだったのです。

かれは、空中にまい上がっていくのです。まるで、スーパーマンのように、からだをのびして、およぐように、空高くとびさっていくではありませんか。二十めんそうは、いつたい、どうして、空をとぶことができるのでしょうか。二十めんそうは、ほんとうの、まほう使いなのでしょうか。

## 黒いかげ

明智たんていと、おおぜいのおまわりさんに取りかこまれたかいじん二十めんそうは、屋根に上がって、そこから、まるでスーパーマンのように、空へとんでいってしまいました。

それから、一週間ほどたった、あるばんのことです。二十めんそうにねらわれた木村さんの家へ、小林くんがたずねてきていました。

木村さんの子どもの、たけしくんときみ子ちゃんは、小林くんとなかよしになっていたので、自分たちの勉強べやへ、小林くんをつれていって、話をしていました。

そのへやの外には、広いにわがあつて、まどに、黄色いカーテンがおりていました。

もう、夜の八時ごろのことでした。三人が話をしていると、とつぜん、ぱつとでんとうがきえて、へやの中がまっ暗になってしまいました。ていでんのようにです。

すると、まどにおろしてあるカーテンが、ぼうつと、明るく見えてきました。そして、そのカーテンに、なにか、もやもやと、黒いものが動いているではありませんか。

たけしくんは、ろうそくを取りに行こうとしましたが、その、もやもやした黒いものを見ると、もう、からだが動かなくなっていました。

三人は、まほうの力で引きつけられたように、カーテンから、目をはなすことができません。

やがて、そのもやもやしたものは、大きな人間の顔であることがわかってきました。まどの外に、なにかが立っていて、その顔が、にわのでんとうの光で、カーテンにうつっているのです。それにしても、なんとというきみの悪い、大きな顔でしょう。一メートルもあるよこ顔が、黒々とうつり、大きな口をあけて、へんなふうにわらっているのです。

「えへへへ……」

なんともいえない、いやなわらい声が聞こえてきました。

「だれだつ。そこにいるのは、だれだつ」

小林くんが、どなりつけました。

「おれだよ、わからないかね」

かげの声が、うすきみ悪く答えました。

「だれだつ。名まえを聞いたまえ」

「うふふふ……、まだわからないかね。おれは、二十めんそうだよ」

「えつ、二十めんそうだつて」

たけしくんときみ子ちゃん、まつさおになりました。

「そこには、小林くんもいるんだろう。いいか、おれのいうことをよく聞いておくがいい」  
かげが、大きな口をぱくぱくやつて、しゃべりだしました。へんな声です。まるで、ほらあなの中でもしやべっているように、ビーン、ビーンとひびく声です。

「いいか、おれは、まだ、この家のほうせきをあきらめていないのだ。あんなひどいめにあわされたのだから、そのかたきうちをするのだ。そして、明智のやつや、小林や、ポケツト小ぞうを、あつと、おどろかせてやるのだ。うふふふ……、いまに見るがいい。ほうせきは、きつと、ぬすみ出してみせるからな」

そこまで聞くと、もう、小林くんはがまんできませんでした。いきなり、まどにかけよると、カーテンをはねのけ、ガラツと、ガラスまどをあけました。てつきり、二十めんそうが、まどの外に立っていると思つたからです。

ところが、ああ、なんとというふしぎ。広いにわには、見わたすかぎり、だれもいないではありませんか。

まどぎわに、しゃがんでいるのかもしれないと、下をのぞいてみましたが、そこにも、人のすがたは見えません。

そのとき、たけしくんが、つくえの引出しから、かいちゅうでんとうを出して、小林くんにわたしたので、それで、そのへんをずっととらしてみましたが、やつぱり、だれもないのです。

あんなかげをうつしておいて、そんなに早くにげられるものでしょうか。そんなことは、とても考えられません。

三人は、ぞうつと、うすきみ悪くなってきました。二十めんそうは、またしても、まほうを使ったのです。

三人は、おくへかけこんでいきましたが、家じゅうのでんとうがきえていてまっ暗なので、かいちゅうでんとうで、台所のスイッチをしらべてみると、スイッチの切れていることがわかりました。すぐに、スイッチを入れましたので、家じゅうが明るくなりました。

三人は、木村さんのへやにはいって、今のできごとを知らせました。

それから、小林くんは、木村さんの耳に口をつけるようにして、ぼそぼそと、なにかささやきました。すると、木村さんは、感心したようにうなずいて、

「うん、それはいい考えだ。きみのいうとおりでしょう」と答えました。

小林くんは、いったい、なにを話したのでしょうか。それは、二十めんそうを、あつといわせるようなけいりやくでした。どんなけいりやくだったか、やがて、みなさんに、わかる 때가来るでしょう。

そのぼんは、そのまま、なにごともしませんでした。十時近くになると、小林くんは、木村さんと、ひそひそとなにかうちあわせてから、たんでいじむ所へ帰っていきました。

さて、そのあくる日の夜のことです。木村さんの家の中で、またしても、おそろしいことが起こりました。

木村さんの家は、広いせいようかんですが、たけしくんときみ子ちゃんのベッドは、二かいのしんしつにあります。

もう、夜の九時もすぎたので、たけしくんときみ子ちゃんは、おとうさんとおかあさん

に、「おやすみなさい」をいうと、パジャマに着かえ、ふたりそろって、手すりのついた  
広いかいだんを上がって、とちゅうのおどり場へ来たときです。後ろからついてきたきみ  
子ちゃんが、急に、「あつ」とさげびました。

そのおどり場は、はば二メートル、長さ四メートルぐらいの板の間で、後ろは、二かい  
のてんじようまでつづいた、白いかべになっています。その、えいがのスクリーンのよう  
な白いかべに、あやしいかげがうつったのです。

「あつ、おにいちやま、たいへんよ。あつ、早くにげなければ……」

きみ子ちゃんの声に、たけしくんは、びっくりして、白いかべを見ました。

おお、これは、どうでしょう。

かべいつぱいの大きな手が、つめの長くのびた指を、おそろしい形にきゆうつとまげて、  
たけしくんの頭の上から、つかみかかってくるではありませんか。

きよじんの手です。まつ黒な手のかげです。

それが、かべにうつったたけしくんの小さいかげの上から、ぐうつとおりてくるのです。  
たけしくんは、あまりのおそろしさに、「わあつ」といって、その場にうずくまってし  
まいました。

きみ子ちゃんが、このことを、おかあさんに知らせたので、大きわぎになり、木村さんや書生などがかけつけてきましたが、そのときには、もう、かべのかげはきえていました。そして、いくらしらべても、どうして、あんなかげがうつったのか、わけがわからないのでした。

ああ、まほう使いの二十めんそうは、これから、どんなおそろしいことを、始めるのでしょうか。

そして、小林くんのけいりやくとは、どんなことでしょうか。

## 16

## われるポスト

さて、そのあくる日のことです。たけしくんときみ子ちゃんが、学校から帰ってきて、門のそばで遊んでいると、門の外から、ひとりの子どもがはいつてきました。

赤い頭の毛を、おとなのようにきれいに分けて、あらいしまのせびろを着た、十二、三さいのせいよう人のような、へんな子どもです。顔は、りんごのように赤く、目は、大きく、まんまるで、頭でつかちな子どもです。

その、へんな子どもが、つかつかとはいってきたので、たけしくんときみ子ちゃんが、びつくりして見ていると、子どもは、たけしくんの前で、ぴたりと止まりました。

「ほく、お使いだよ。さあ、これ手紙」

といって、白いふうとうを、たけしくんにさし出しました。

たけしくんが、それを受け取ると、へんな子どもは、くるつと後ろを向いて、つかつかと、門の外へ出ていきました。

それから、じつにみようなことが起こったのです。

へんな子どもは、門を出ると、向こうがわに立っている、まるいゆうびんポストのそばへ歩いていきました。

すると、ふしぎなことに、そのポストがぱつと二つにわかれて、大きな口を開いたではありませんか。

あたりは、まったく人通りがないので、だれも見ているものはありません。

へんな子どもは、その二つにわれたポストの中へは行っていききました。すると、ポストは、もとのとおりに合わせて、ふつうのポストになってしまいました。

こうして、へんな子どもは、ポストの中へかくれてしまったのです。

そのとき、門の中のたけしくんは、わたされた手紙のふうを聞いて、中の手紙を読んでいました。それには、こんなきみの悪いことが書いてあったのです。

今夜、ほうせきをもらいに行く。いくら用心しても、だめだよ。二十めんそう

さては、今の子どもは、二十めんそうの手下だったのかと、たけしくんは、門の外をにらみつけました。

「おにいちゃま。あの子、人間じゃないわ。きっと、お人形よ」  
きみ子ちゃんが、へんなことをいいました。

それを聞くと、たけしくんも、はっと気がつきました。

「そうだった。あいつ、きかいみたいなの、へんな歩き方をしたね。声も、キーキー声で、レコードみたいだった。それに、顔がちつとも動かなかった。あいつ、子どものロボットかもしれない」

たけしくんは、そういつて、いきなり門の外へかけ出し、通りの右左を見ましたが、子どものすがたは、どこにも見えませんでした。

「おやつ、あんなところにポストが立っている。いつできたのかなあ」

たけしくんは、通りの向こうがわに、見なれないポストを見つけましたが、まさか、あんなしかけのあるポストとは知りませんから、ここへ、新しくできたのだろうと考えました。

たけしくんときみ子ちゃんが、今の手紙をおとうさんに見せるために、家の中へはいつてから、しばらくすると、一台の小がたトラックが、あのあやしいポストのそばへやって来ました。

ふたりの男が、トラックからおりると、そのポストを持ち上げてトラックにつみ、上から大きなおおいをかけて、そのまま、どこかへ走り去ってしまいました。

ふつうのポストなら、とてもふたりの力では持てませんから、このポストは、本物より、

ずつとかるくできているのにちがいありません。

あのへんな子どもも、ポストの中にはいったまま、運ばれていったのです。

## ロボット小ぞう

おそろしい手紙を読んだ木村さんは、すぐに、けいさつや、明智たんに電話をかけて、二十めんそうがやって来たら、つかまえる手はずをとのえました。

昼間から、五人のけいじと、明智たんにい・小林くん・ポケット小ぞうたちが、こつそりやって来て、ほうせきを守るために、それぞれの持ち場につきました。

さて、その夜のことです。

たけしくんときみ子ちゃんは、書生にまもられて、しんしつにとじこもっていましたが、はとどけいが、「ポツ、ポツ、ポツ」と、九時をうったときです。

「コツ、コツ、コツ」

だれかが、ドアをたたくのです。「だれっ」と聞いても、なにも答えません。そして、また、コツ、コツ、コツと、たたくのです。

たけしくんは、そつとドアに近づくと、いきなり、ぱつとあけました。

すると、ドアの外に、へんなやつが立っていたのです。ロボット小ぞうです。昼間、手紙を持ってきた、あの、へんな子どもです。

「あつ、きみは、さっきの子どもだな。なにしに来たんだつ」

たけしくんが、ゆうきを出して、どなりつけました。すると、

「へへへ……」

ロボット小ぞうは、へんな声でわらいました。そして、ろうかを、とことこと向こうへ歩いていくのです。

「待てつ」

たけしくんは、そのあとを追いかけました。書生たちも、いっしょになって追いかけました。

「みんな、来てください。へんなやつがいます。二十めんそうの使っている、子どものロボットがいるんです」

と、たけしくんがさけびました。

その声を聞くと、けいじたちが、かけつけてきました。

ロボット小ぞうは、そんなに早く走れないと見えて、からだをまつすぐにして、あいかわらず、とことこ歩いているものですから、たちまち、けいじたちにつかまってしまいました。——このへんな子どもは、はたして、人形だったのでしょうか。

さて、ちようど、そのさわぎのさいちゆうに、まつ暗な木村さんのしよさいでは、おそろしいことが起こっていました。

からだにぴったりついた、黒いシャツとズボンを着けた黒ふくめんの男が、金庫の前にしゃがんで、なにかしているのです。

みんなの注意を、ロボット小ぞうのほうに集めておいて、その間に、ほうせきをぬすみ出そうというのでしょうか。この、黒ふくめんの男は、むろん二十めんそうなのです。

二十めんそうは、金庫やぶりの名人ですから、どんなげんじゆうな金庫でも、わけなく開くことができるのです。

カチツという音がして、金庫のとびらが開きました。そのときです。二十めんそうの口から、「わあつ」という、おどろきのさけび声がとび出しました。そして、二十めんそうは、いきなり、にげ出そうとしました。

これは、いったい、どうしたわけでしょう。

金庫の中に、なにがはいっていたのでしょうか。

17

あらわれた明智たんてい

二十めんそうがおどろいたのも、むりはありません。金庫の中のたなが、すっかり取りのけられて、そこに、少年たんでいだんのポケット小ぞうが、かくれていたからです。

ポケット小ぞうは、ピストルをかまえて、金庫の中から出てきました。小さな子どもですが、ピストルにはかありません。二十めんそうは、両手をあげて、あとじさりをしました。にげ出そうとすれば、うたれるので、にげるわけにはいきません。

「はははは……。ほうせきばこを、べつのところにかくして、おいらがはいっていたのさ。そして、おじさんのあけるのを待っていたんだ」

ポケット小ぞうは、そういつて、金庫のかべにとりつけたベルのボタンをおしました。

「これをおせば、方々ほうぼうでベルの鳴るしかけだ。いまに、みんながやって来るからね。おとなしく待っているんだよ」

それを聞くと、こんどは、二十めんそうのほうが大、大声でわらいだしました。

「わはははは……、だめだよ。そのベルは、おれがさつき、線せんを切っておいた。いくらおしたって、鳴りはしないよ」

ポケット小ぞうは、はつとして顔色をかえました。そのすきを見て、二十めんそうが、いきなりとびかかってきたのです。そして、ポケット小ぞうのピストルを、たたき落としました。

ポケット小ぞうは、「あつ」といって、ピストルをひろおうとしました。二十めんそうは、それをつきとばして、自分がピストルをひろおうとします。ポケット小ぞうは、すぐにとびついていって、二十めんそうの手にかみつきました。

「あつ、いたいっ」

さすがの二十めんそうも、かみつかれてはかありません。

それから、おとなと子どもの大かくとうになりました。

ポケット小ぞうはすばしこいので、つかまえようとすると、するりとぬけ出してにげ回

り、あい手が近づくと、またどこかに食いつくのです。

二十めんそうも、この小さなあい手にてこずっていました。そのうち、とうとうポケット小ぞうをつかまえて、大きなハンカチでさるぐつわをはめ、どこからかなわを取り出して、手足を、ぐるぐるとしばってしまいました。

「ちんぴらのくせに、ほねをおらせやがった。だが、もう、どうすることもできまい。ははは……。いつまでも、そこころがつているがいい。それじゃあ、あばよ」

といって、にげ出そうとしたときです。

「二十めんそうくん、しばらくだつたなあ」

という声が聞こえ、ドアのところ、明智たんでいのこにこ顔があらわれました。

二十めんそうは、「あつ」といって、はんたいがわのドアにかけてけると、そのドアが外から開いて、そこに、ピストルをかまえた小林くんが立っていました。

「はははは……。二十めんそうくん。さすがのきみも、もう、どうすることもできないね」  
二十めんそうは、ぱつと身をかめると、ゆかに落ちていたポケット小ぞうのピストルをひろい取って、明智たんでいの足に、ねらいをさだめました。

## 二十めんそうのさいご

「おれは、人ごろしはきらいなんだ。だから、きみをころしはしない。足をうつんだ。そして、にげ出すんだ」

そういったかと思うと、いきなり、ピストルの引き金を引きました。——カチツと、音がしました。しかし、たまはとび出しません。また、引き金を引きました。けれど、またカチツと音がするばかりです。

「あははは……。そのピストルには、たまがはいつていないんだよ。ポケットくんが、おどかしに使っただけだよ」

明智たんていが、さもおかしそうにわらいました。

「しまった」

とさけんで、二十めんそうは、ピストルをなげつけました。さつき、からのピストルに手をあげたのかと思うと、くやしくてたまらないのです。

かれは、いきなり、明智たんていとびかかっていききました。

またしても、大かくとうが始まりました。二十めんそうも強いが、明智たんていも、じ

ゆうどうの名人です。おそろしい組みうちがつづきました。

ちようど、そこへ、五人のけいじがかけつけてきました。そして、二十めんそうは、とうとう手じようをはめられてしまったのです。

二十めんそうがつかまったと聞いて、木村さんは、たけしくんときみ子ちゃんをつれて、そこへやって来ました。

小林くんは、しばらくられているポケット小ぞうのなわをとき、さるぐつわをはずしてやりました。口がきけるようになると、ポケット小ぞうはすぐに、二十めんそうをどなりつけました。

「ざまあ見ろ、とうとうつかまっちゃったじゃないか。明智先生は、えらいだろう。おまえなんか、かないっこないよ」

ポケット小ぞうは、もと、ちんぴらですから、ことばづかいが悪いのです。

そのとき、たけしくんが、明智さんていを見上げてたずねました。

「先生、ぼく、わからないことがあるんです。おとといのばんは、まどのカーテンに、大きな顔がうつったでしょう。ゆうべは、かいだんのかべに、おそろしい手がうつったでしょう。そして、どこをさがしても、だれもいかなかったのです。どういうわけですか」

すると、明智たんていは、にこにこして答えました。

「あれは、げんとうだよ。きかいを、にわのしげみの中にかくして、あんなかげをうつしたのさ。そのげんとうきは、ずっと遠くからうつせるから、だれもいないように見えたのだよ。ね、そうだろう、二十めんそうくん」

二十めんそうは、<sup>にが</sup>苦い顔をして、うなずきました。

「それから、もう一つわからないことがあるんです。二十めんそうは、どうして空をとぶんですか」

「それは、二十めんそうがフランスの発明家から買った、せなかへとりつけることのできる、すごく小さなヘリコプターなんだよ。二十めんそうは、木の上なんかはそのきかいをかくしておいて、さいごには、いつも、それでにげ出していたのだ」

明智たんていは、なにかも知っていたのでした。こうして、さすがのかいじん二十めんそうもつかまってしまったのです。木村さんは、ほうせきをぬすまれないですんだのでした。

「明智先生、ありがとう。小林くん、ポケット小ぞうくん、みんなありがとう」

木村さんは、にこにこして、みんなにお礼をいうのでした。





## 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第21巻 ふしぎな人」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年3月20日初版1刷発行

底本の親本：「たのしい二年生」大日本雄弁会講談社

1958（昭和33）年8月～1959（昭和34）年3月

「たのしい三年生」講談社

1959（昭和34）年4月～12月

初出：「たのしい二年生」大日本雄弁会講談社

1958（昭和33）年8月～1959（昭和34）年3月

「たのしい三年生」講談社

1959（昭和34）年4月～12月

※「たのしい三年生」初出時の表題は「名たんていと二十めんそう」です。

※底本は、連載の回数を見出しとしています。

入力…sogo

校正：北川松生

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ふしぎな人

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>